

つてゐたのとはまるきりちがつて、中には緑白赤三色の、花と松葉の蒸菓子  
縦に十と横に五つと並べてあつた。

「やあ、こんなにきれいに並べてあつたら、一つつまめやへんが」

私はひとりごとを言つて、箱をいぢりながら、見てゐた。

そこで、勉強してゐた姉さんを誘ひ出して来て、相談の結果、二人でたべるこ  
とになる。その對話がまた面白い。

「まあ、かまはへんが。お母さんに見つけられたら、軍隊式に二人たべました、  
と、きつぱり言をさ。いやか」

「言を」

「とるで」

「まちな」

「うゝん、とろさ」

「まあ。……よつしや」

といふなり、姉さんは箱へ手をかけた。

「ちよつと」

と、今度は私がとめた。二人は顔を見合せた。

「たべよか」

「たべるけど、まあちよつと」

「自分が呼び出しにきといて、なんやの」

「姉さんは、こんなことにはうまいちゑ出さはるさかいや」

「あほなこと言はんときさ」

「ふん、そんなんやつたら」

と、私がつままうとすると、姉さんが、

「ちよつと」

と、私のからだを動かした。

「なにや」

「まあ待ち、えらさうに軍隊式で言うてるものの、食べてしもてから、どうす

ることも出来やへんが」

「そやよつてん、かなはんのやが」

「かまはへん。もうたべよ」

「ええか」

「日本女子たるものが、一粒のお菓子で、氣をなやましてゐるやうなことではいかん」

「そらさうや」

「よし、もうたべよ」

「ふんたべよ」

姉さんは白、私は赤をとつた。それから二人は、庭さきを眺めながらたべた。

ある子供が、琵琶湖に遠足した時のことを材料にとつた。その中にこんなところがある。

お便所へ行きたくなつたので、立つて上へ上らうとした時、ぐらつと船が傾いた。「あつ」と言つて、柱をつかんだ。

(略)

ねちをくるくる廻したが、戸があかない。右へ廻して引つぱつたり、左へ廻して引つぱつたり、幾度も同じことをしたが、どうしてもあかない。ここと違ふのかも知れないと思つて、船の端の方に便所があつたやうな氣がして、いつてみると、お茶をわかしてゐた。もどつて、またねちを廻した。すると、ぎゆつといふ音がして、ハンドルが廻つて中から戸があいた。女學校の人だつた。顔中一ぱい汗をかいてゐた。私のそばに立つてゐた人が、はいりかけ、

「げろげろや……(げろくとは嘔吐のこと)

と言つて、飛んで出て來た。げろげろと聞いて、頭がびりつといたんだ。

中から出て來た生徒が、顔に一ぱい汗をかいてゐたこと、船酔ひの様子が、さうといつてはゐないのに、よくわかる。美しい材料ではないが、面白くかけてゐ

る。

子供と綴方教育

一九四

第八講 材料について

【二】綴方の材料になることゝならぬこと

日常生活の中で、變つたことなら、何でも綴方の材料になるかと言ふと、それはならないと答へる。どんな大きな事件でも、綴方の材料にならぬことがある。それかといつて、ほんの日常の些事でも、立派に材料になることがある。人はよく小説的場面などいふ言葉を、軽々しく用ふ。いゝ小説の材料でせうといつたりする。作者の心の中に、それと相通する心境があつた場合に、それが動機となつて、いゝものが出来ないと限らない。しかし、作者の心の中にそれを受け入れる心境がなかつた場合は、それを材料にして、大衆文藝的な讀物は作ることが出来るかも知れないが、藝術品をつくることは、全然出来ない。作者自身の心にとけ込み、感激のわき出るものからでなければ、決して藝術品は出来るわけではないから。といつて、こんな他愛もないものかと思はれるやうなものでも、作者の心に宿つてゐる感激の如何によつては、偉大なものに仕上げる事が出来る。綴方の道理も、これと同じである。綴方は子供の藝術品だから。

【三】綴方は全部子供藝術

人は或は綴方の材料は藝術的なものばかりではないといふかも知れない。しかしそれは、今迄の綴方の場合で、今後の綴方には通用しない。何故かといふと、綴方で取扱ふ材料のうち、藝術の意志に關係のないものとはどんなものかを考へてみるとよい。それには、手紙文、論文の二つがある。手紙文のことは別して、論文を綴方で取扱はうといふのは、全然考へ違ひな話だと思ふ。論文なら論文で、理科で取扱ふとか修身で取扱ふとか、それには綴方よりも適切有力な教科が他にあるのだから。さういふものまで綴方の仕事に入れようといふのは、他の教科がそれだけ本質的な仕事をしてゐないからである。手紙文はなる程綴方の仕事である。しかし、よい綴方の作れる子供に、よい手紙のかけないやうな子供が、本當にあるだらうか。私の経験では、それは決してないことである。よい綴方がかけて來出すと、きつとよい手紙がかけるやうになる。私は手紙文の練習など、餘りしたことがない。休暇などに子供から貰ふものを材料にして、話したりしたことがあり、一年に二三回、それは時間を定めてはがきや手紙をかゝせてみたこともある。まあそれ位

の程度の指導であつた。それで十分だと思つてゐる。話は少し横道にはいつたから、このことは、これ位に止めておく。綴方とはどんな教材で、どんな仕事をすゝめるのが當り前であるかといふことは、已に話したことなのだから。

### 【三】材料に對する作者の興味

綴方は左様にして、子供の心から湧いてくる感激を、立派に盛上げることが、練習する仕事である。だから綴方の中では、作者のゆつたりとした、愉快な仕事ぶりがうかゞはれなければならぬ。義務的な感や、實務的な手腕が躍動してゐるのでは、いくら要領よく出来てゐても、綴方だといふ資格を持たぬ。悲しいことを材料にしてゐるにせよ、苦しいことを材料にしてゐるにせよ、作者自身が、その材料に興味を持ち、表現することが楽しみで、思索することが愉快であるのでなければ、綴方にはならない。讀者の心に、その材料の中にとけ込んで、面白がつてかいてゐる作者の心が、うつつて來ないので、これを綴方だと認めることが出来ない。或る事件を綴方の材料にするかしないかは、そこで決まる。些細なこと、平凡なことでも、興味さへ起れば、綴方の材料として、力相當なものに仕上げる事が

出来る 前々から、いろいろな文例を示したことでもあり、後々もさうしようと思つてゐるから、それ等について見て貰ふと、さういつた意味のことが、よく批判してもらへると思ふ。尙参考のために、前々からの綴方とは少し内容の違ふ、日常の些事といつたものの二三を、次にのせてみることにす。

### 【四】文例 水の泡

(六年女兒)

「あと頼みますよ」

といつて、お母さんは出て行かれたが、又もどつてきて、

「それから、いろいろ言つときますけれど、どんなものでもよいから、御飯のしたくしといて下さいね。節子頼みますよ」

といつた。

「ふん。勉強してからやで」

「さう。頼みますよ」

「ふん。ひき受けた」

といひながら、私は奥へはいつた。今日は、お母さんは、親類へ行きなさるし、お春は良ちやんと、瑛子ちゃんを連れて、齒醫者へ行つて、歸りに方々へ使ひに行くといつてゐたし、お菊もお使ひにいつたし、家には、私とお父さんとだけになつた。私は勉強をしようとおもつたが、お母さんに言ひつけられたことが氣にかゝつて、する氣にはなれなかつた。よい御ちさうをこしらへて、みんな、驚かしてやらんならん。と想ひながら、大分早い時から、私は台所へ行つた。

「さあ。第一に御飯たかんならん。御飯のたき方やつたら知つてる」  
一人ごとをいひながら、水かけんをして、火にかけておいた。

「これからが、むつかしいね。どんなものこしらへよ」

私は、お菊がかいてはりつけてゐる献立表を見た。

「さうや。お父ちゃんとお母ちゃんには、もやしの酢のものにしとこ。それからと、自分等の食べるものには、さうや、さうや、ちりめんじやこを甘からく、つくだに、みたいにたいとこ」

さう言つて、私は材料をそろへた。

「さあ、もう一つ、なにか變つた發明して、お母さんを驚かしてやらんならん」  
と思つて、一生懸命になつて考へた。

「どんなものええやろな。おこげの酢漬なんてあらへんし。どんなものにしよ」と考へてゐるうち、ふと、お茄子のでんがくのことを考へ出した。

「さうやさうや。一べん胡瓜のでんがくして見たる。お茄子のでんがくやつたらあるけど、胡瓜のでんがくなんて、私の發明や。誰も知つてるものあらへん。さうやさうや。さうしよ」

私はうれしくなつて來た。胡瓜を持つて來て、丸く輪切に切つた。

「さあ、これ焼くねんな」

一人言を言ひながら、胡瓜を串にさして、火にかけた。それからお味噌をつくりにかゝつた。

「さうやさうや。お味噌かて、ただのお味噌やつたら、發明にならへん。さうやな。どんなお味噌こしらへたらよかる」

しばらく考へた。

「さうやさうや。かうしよ。お砂糖と、醤油と、一しよにまぜて、それから、一寸お酢入れて、それから、そこへお味噌を入れてやろ」

私は、醤油と、お砂糖をまぜ、お酢を入れて、お味噌と一しよにかきまぜた。

「こんなんやつたら、味いかんかも知れへん。色は同じやけど。もつと變つたもの入れんな」

一寸また考へて、

「さうや、ごま入れてやろ」

私は、いつたごまをお味噌の中に入れてかきまぜた。

「さあこれで一先づお味噌はよいと」

と、いひながら、板敷に腰をかけて、一寸休むと、急に暑くなつて、汗がほぐべたの所まで流れてきた。

「あああ」

汗をふいた。ほつと一息すると、どこからかこげ臭いにほひがしてきた。

「やあ、胡瓜こげついたんやろ。えらいこつちや、えらいこつちや」

私はとんでいつて、串にさした胡瓜を取り上げた。それ程こげてなかつた。

「さあ、これからお味噌をつけるねん」

といつて、お味噌の中に、その胡瓜を放りこんだ。お箸で、裏がへしたり、表がへしたりしてお味噌をつけて、お皿に入れた。變つたものが出来たと思ふと、うれしさがこみ上げて来た。なんだか踊りたくなつた。おかずを冷蔵庫の中に入れて、それから庭をはき出した。はき終つて、汗をふいてみると、お母さんと、お菊とが道で一しよになつて歸つてきた。

「ああ暑かつた」

お母さんが汗をふきふき、玄關の入口に腰をかけた。お菊も、

「ほんとに暑いでしたな」

といひながら、汗をふいてゐた。お母さんは、

「節子。あんた御飯のこしらへしといてくれましたか」ときいた。

「ふん。したもしたも大したもので。私の發明したものもあるね。お母ちゃんが好きなもの澤山々あるね。おまけに家の中はいて、庭さきまではいいてん」

と言ふと、

「そらまあ、大したこつちやな。そら御苦勞さんやつたな。さあ着物をきかへてから、ゆつくりと見せて貰ひまつさ」

といつて、奥の方へいつた。お菊は、汗をふいてゐたが、ちよつと笑つて、

「お嬢さん。明日雨降らしまへんやろか」といつた。

「あほうやな。いけずやなア」

といつて、私はぶつまねをした。

「ほんとにお嬢さん。天氣の模様變つてきましたで。珍しいですな。お嬢さん」

「あほうやなア。もうそんなこと言はんときさ」

「さうしたら、早速したもの見せてもひましよ」

「いらん。御飯の時やないと見せたらへん」

といつて、私は勝手の方へいつた。お春もみんな歸つて來たので、御飯にすることになつた。中の妹は、

「さう。姉ちゃん、どんなもんしやはつてんやろ」

と言つた。いよ／＼お膳を出して、お茶碗も出して、おかずを出しにかゝつた。一番先に、もやしの酢のものを出した。お父さんは、出すとすぐ食べ始めた。そして、

「こりやなか／＼うまいぞ。いつものよりもうまいぞ」

とおつしやつた。私は胸がどきどきして、うれしくなつてきた。次ぎは私共のたべる、おじやこのつくだにを出した。妹共はすぐたべ出した。

「やあ、おいしいわ、大つき姉ちゃん、氣きいてる。私らから、いもん好きやから、かる炊いたる。いつものより、すつとおいしいわ」

と、中の妹は、口にほうばりながら言つた。

「そらさうや。姉ちゃん、上手やろ」



と、私はじまんをした。その次ぎに、胡瓜のでんがくを出した。お父さんは、ふしぎさうに、

「それなにや。なすびのでんがくか」

とおつしやつた。

「いいや、まあたべてみ」

と私は言つた。お母さんは、

「面白いものこしらへて、一體それなに」

「まあたべてみて言うてるのに」

お父さんとお母さんは、不思議さうに、口元へ持つていつて、お父さんが、

「節子大丈夫やな。なにも毒なもの入れてないね」

といつた。

「めつたにそんな心配いらんて。早よたべさ」

お父さんは一口食べて、

「これなにやね。へんな味してたべられないが」

といふと、お母さんも一口たべて見て、

「まあほんとに、おもしろい味ですこと」

と言つた。私は、

「お母ちゃん。それな胡瓜のでんがくやね」

といふと、

「胡瓜のでんがく」

「そんなものあるか。あほうやな、お前」

と、お父さんとお母さんが、かはるがはるいつた。

「そねん言ふけど、それが發明やろ」

「あほうやな、發明なんて。食べられないやうなものをこしらへて、發明なんて言はれないよ。あはは……」

お父さんは、口に御飯をほほばつて笑つた。お母さんも、

「お前の發明は、でたらめはつめて言ふのね」

といふと、妹までも、

「むちやくちや發明は中西節子女史」

と、大きな聲でいつた。私は腹が立つたので、

「さういふけれど、苦心に苦心を重ねて、これこしらへたのに、お禮の一つも言はんと、笑つてばつかしむて」

といふと、

「さうやな。こんなものの發明でも、お前にとつては苦心か。さうか苦心か。ほんとにお前にとつては、これが、苦心さんたん、水の泡といふものやな」といつて、お父さんとお母さんは、又大きな聲で笑つた。

### まはらない舌

(五年女兒)

お母さんが、たんすの前で、ひらべつたい箱を風呂敷に包みながら、

「一寸お前、松石の家へせいぼ持つていつて来てんか」

と言つた。私は朝飯をすませたところだつた。

「勉強せんならん」

と、私は一寸いやな顔をした。

「勉強みたいなん、何時でも出来るやないか。たんと用事しといて、それから勉強するもんや」

と、お母さんが言つた。私はしつこく言うてゐたら、怒られると思つて、いやいや「うん」と返事をした。

「髪なでつけて來なはれ」

「かまへん。これでええ」

といひいひ、私は服をきかへた。お母さんは、さつき包んでゐた風呂敷包みを私のそばに持つて來て、

「あのな、初めな、あそこの家にはいて行つて禮するねやで」と言ひなさつた。

「わかつてるやろ。うちかて五年生になつてまんねんで」

「まあ聞きなはれ。そしてな、うちらから出てきなさつたらな、毎度お父さんが出まして、すみまへん。一寸これほんの目じるして言うて渡すねんやで」

「ふんよつしや。わかつた」といつて、

「この中に何はいつてんの」といひく、下駄をはいた。

「しきしまの煙草や」

「なんぼはいつてんの」

「おかしな子やな。早よいて來。さつき言うたこと、わかつたるな」

「わかつたる」

私は家を出た。お母さんが、

「毎度おほきに。お父さん出て來らりまして、すみまへんな。と言へと言うたけど、そんなえらさうなこと言うたらいかんよつてに、一寸言葉かへてやる。どう言うたらええやろ」

と、口の中でいひくずんく行つた。

「いつもお父さん來やはりまして、えらい御やつかいでございます。これ一寸

ほんの目じるしで」

と言うたらええ。

「ああそやそや、さう言はう」

と思つて、口の中でけいこをしながら歩いた。松石の前まで來た。はいつて、

「ごうめん」

といふと、中から小母さんが出てきなさつた。

「今日は」

「おいでやす」

私は、顔がくわくしてきて、ものがいへないのを、やつとのこととて、

「まいろおほきに。お父さんあやかしにきやはりまして。えらい御やつかいでござります。これ一寸の目じるしで」

と言つて、風呂敷包みをつき出した。小母さんは、それを持つて奥にはいつて行きなかつた。私は其の時、自分のいうたことで、あんばい舌がまはらなかつたことを知つて、はづかしくなつてきた。

「もつとゆつくり言うたらよかつた。あんなこと言うてかなはんわ」  
と思つた。

「かまはへんわ。よろ知つてはらへん」

と思ひながら、横にあつたこしかけに、こしをおろした。しばらくすると、又ちがふ人が出てきなさつた。其の人は先の人よりは、大分年よりだつた。その人はじんべを着てゐなさつた。其の人は私に、

「おほきに。よろしゆう言うといて下はれや」

と言つた。私は、

「へえ、大きに。さようなら」

と言つて、その家を出て、走つて家にかへつた。

### おとみちやん

(六年女兒)

ゆかたを着て、皆表で涼んでゐた。お祖母さんも出て來た。近所の子が四五人かたまつて、腰掛にかけてゐた。腰かけが小さいので、うまくかけられないの

か、

「私の場、こゝだんで。取らんとかはれ」

「やあ、そこ私の場だんで」

と、口々に言つてにらみ合つてゐた。そこへ隣のおことさんが來て、  
「子供くさいことせんと、一ぺん皆立つてから、うまいこと坐りさ」  
と言つたので、皆立つた。するとおことさんは、そこへ坐つて、

「あつさり場取るやろ」

と言つて笑つた。皆はそれを見るなり、腰掛にすはつて、押しはじめた。するとおとみちやんが、急に押すのを止めて、

「えゝことある。おしおしごんぼしやへんか」

と思ひついたやうに言つて、皆を見渡した。

「しようしよう」

と言つて、皆立上つた。おことさんが、

「二手に分れてしよう。誰となつても怒りなしやで」

と言つた。皆はじやんけんをはじめた。あやちやんが、

「何でもおこりなあしで。ほい。じやん」

と言ふと、おとみちやんがつけたして、

「おこつたら、げんこ一つ、いくねんで。ほい」

と言つた。じやんけんをして、二手に分れて腰掛に坐つた。おことさんが、

「用意どん」

と言つた。皆は聲をはり上げて、

「おしおしごんぼ。出た者たねし。よいしよ、よいしよ」

と言つて押し出した。おとみちやんが、腰掛にまたがつて、はしを持つて、

「ようんしよ。うんとこせ」

と言つて押し出した。お秀ちやんが、おとみやんとおことさんに押されて、場がなくなつたのか、立つたまゝで、腰掛の上に寝るやうにしたら、おことさんが、

「あんたもうあかんで。たねしや」

と言つた。お秀ちやんは腰掛からはなれた。あやちやんも君ちやんも、あかんと思つたのか腰掛からはなれた。おとみちやんは、一生懸命におことさんを押し、場を皆とつてしまつた。君ちやんがおとみちやんに、

「あんたら、よう肥えてるさかいに、力あるけども、私らみたいな、やせがらやつたら、力あらへんもん、負けるのはあたりまへや」

と言つた。おとみちやんは肩をいからせて、身體をそらしながら、

「そらそや。私は天下の豪傑やさかいにな」

と言つた。おことさんが、

「おとみ、よう肥えるのん、決つたこつちや、一寸してはたべ、一寸してはたべして、五はいも六ばいもたべらるねやもん」

と、おとみちやんを見下しながら言つた。

「姉ちやんみたいな、食の細い人あくか」

と、おとみちやんは、おことさんを見上げて言つた。おとみちやんは、袖をまくり上げながら、

「一人一人で、しやへんか」

と言つた。くやしいのかおことさんが、

「よし。いたろ」

と言つた。

「そんなんやつたら、四年どうしやさかいに、君ちゃんとしよう」

と、おとみちやんが、もう腰掛に坐つて言つた。君ちゃんは、さう急がずに、

「あんたらみたいいな豪傑としたらかなはん」

と言つたが、

「まあしようさ」

と、おとみちやんが、しつこく言つたので始めた。おとみちやんは、また腰掛にまたがつて、はしを持つた。君ちゃんは横に坐つた。おとみちやんは、蛙のやうだつた。

「君ちゃん勝ちや。おとみちやん負かし」

と、おことさんは、おとみちやんをにらみながら言つた。それでもおとみちや

んは、平気で、用意どんと言つて押し出した。

「いま勝たな、かなはん。ううんとこせ」

といつて力を出してゐた。君ちゃんは、お嬢さんのやうに行儀よく坐つて、あまり力も入れてゐないやうだつた。おとみちやんは、だんだん君ちゃんを押しつめた。此の時おとみちやんのお母さんが、其所を通つて、

「あなたの行儀」

と言つて、顔をしかめた。おとみちやんは、聞えなかつたのか、そのまゝで押ししてゐた。君ちゃんは、腰掛の端まで押しつめられた。おとみちやんが、強く押したので、とうとう出てしまつた。おとみちやんは汗をかいてゐた。君ちゃんが、

「あんな子としたら、かなはん」

と言つた。おとみちやんは、

「そら私は、天下の豪傑やもん」

と、またやり出した。おことさんは、いまいましてさうに、おとみちやんをみて、

「君ちゃん負けたらあかへん」と言つた。

「そんなんやつたら、姉ちゃんといたるか」と、おとみちやんが、おことさんの顔をのぞきこんで言つた。おことさんは何を思つたのか、いらんと言つて家へ歸つた。おとみちやんは、そりかへりながら、腰掛からはなれた。

### 病床日記

(五年女兒)

六月三十日 水曜日 晴

十四日の日から病氣で、私は床についてゐた。昨日から大分よいが、お醫者さんは、「勉強をしたり歩いたりすると、血が出てしまつてやせる」といつたので、まだ學校にはゆけない。

朝起きて、私は學校にゆきたいので、お母さんに、「學校へいつてもよいか」

ときいた。お母さんは、

「お醫者さんのいつたこと、わからないのか」と叱るやうに、いひなさつた。

朝飯をたべて、弟と遊んでゐると、楯の看護婦が、ちゆうしやをしにきた。ちゆうしやをしてもらつた。すると、どうしたことか、手がいたくて動かすことが出来なくなつた。それから寝てしまつた。午後になつて、大分なほつたので、起きてお父さんと、お宮さんの方へ、散歩にいつた。かへつて夕飯をたべたが、たべたあと、熱が上つて、三十八度六分になつた。それで水枕をしてねた。

七月一日 木曜日、晴

朝起きてみると、熱はひいてゐた。今日は病氣にかゝつてから、初めて齒ようじをつかつたので、氣持がよかつた。朝飯をたべてゐると、お醫者さんが来て下さつた。お母さんがお醫者さんに、昨日のちゆうしやのことを話された。お醫者さんは、

「ちゅうしやの浅い時には、薬が方々にまはらないからで。その深い浅いのかげんで、さうなるのだ」といひなさつた。お母さんは、安心した顔をしなさつた。その日は熱もなかつた。

七月二日 金曜日、晴

明日は、夏物大賣出しなので、お父さんともりさんと二人で、店をかたづけつてゐなさつた。私は、熱がなかつたので、お父さんの手傳ひをした。姉さんは、七月一日から半日授業なので、御飯をたべてゐると、歸つてきなさつた。午後姉さんと檜へちゅうしやをしてもらひにと、お薬をもらひに行つた。ちゅうしやは何時もよりいたかつたが、しんぼうが出来た。薬の出来るのを待つてゐると、四十五六の小父さんが、十か十一の男の子をだいて來なさつた。聞くと蜂の巣をとりについて、蜂にさされたのだといふことだつた。さされて一時間ほど、目もあかないで、ものも言はなかつたと話してゐた。お医者さんは一寸

見て、

「これはからだに毒がまはつて、心臓が弱つてゐます」といつてゐなさつた。その子は、大きなびんの中のお薬で、ちゅうしやをしてもらつてゐなさつた。聞いてゐる間に、私の薬ができた。家にかへつて、その話を、お父さんとお母さんにいふと、「かはいさうにな」と、ふしぎな顔をしてゐなさつた。

七月三日 土曜日、晴

今日は、からだがらくであつたので、妹と遊んでゐた。午後に藤岡さんと杉原さんが、見まひに來て下さつた。妹と四人でいろいろなことをしてあそんだ。

七月四日 日曜日、雨

今日は、からだはもうすつかりよかつた。妹や姉さんとぼたへてゐると、お母



さんが、

「雨ふつたら、みな内にゐるよつて、うるさい」といつて叱つた。

長らく學校へゆかれなかつたが、明日からゆけると思ふとうれしくて、夕方、時間割を合せたり、洋服のしたくをしたりした。

第九講 境遇と子供 (一)

### 【一】子供と境遇

境遇が子供の心にどう影響するか。また子供は、どれ程の力量をもつて、日常、境遇に當つてゐるか。綴方の上から、これを眺めてみると實に面白い。文例について、だんぐ、見ていつてみようと思ふ。

#### 或るおばあさん

(六年女児)

或日、私は敏ちやんと、廣つばへまりほりに出かけた。遊んでゐた時、向ふの方から、いつもよく見る子守のおばあさんが、だんぐと、私達の方へやつて来た。

「敏ちやん。又な、あのつんぼのおばあさん、來やはつたで」

「腰のまがつた子守のか」

「せや、あのかつかう見、大きな子負うて、今にもころげさうや」

「ふん、まあどうでもいゝが。まりほりしよう」

私達は、またはじめた。おばあさんは、

「よしよし。よしよし」

といひながら、私達のそばまで来た。そして、

「あの子、なんぼほど、よう投らはりまんはのやる。あの遠い所までな」と、負うてゐるその子にいつた。

「それ、あの恰好はみい。手を上げて、ようまあ、投らはるな」

と、いつかど、上手な選手を見てゐるやうにいつた。私はおかしくなつたので、ふふふふと笑ひながら投つた。敏ちやんも笑つてゐた。おばあさんは私のそばに來て、

「いとさん。今日は」

といつて、背中の子に指をさして、

「この子はな、一つも寝やんと、起きてばつかりゐて、私はもう六十九だんのにな。ほんまに肩のこるのに、かなひまへんねんわ」といつた。そして、又下をむいて、

「よしよし。よしよし」

といつた。私はもつと何か聞いてみたくなつたので、おばあさんの耳のそばへ

口をつき出して、大きな聲で、

「あのな、一月に月給なんぼだんねん」

ときいた。聞えなかつたのか、

「あのさうだつしやろ。私ほんまにかなひまへんねんわ」

と、おばあさんはいつた。私と敏ちやんは、

「あはは……」

と笑つた。

「ちがひまんが。あのな、一月に月給なんぼだんねん。とたづねてまんねん。」と、先よりも大きい聲でいつた。するとおばあさんは、

「一月だつか。あのな、朝は五時に起きて、晩は十時にねて、いつも御飯をたきましてな、又かうして守をしてな、一月に四圓だつせ」

といつた。私は、おばあさんが、かはいさうになつた。

「一寸敏ちやん。一日になんぼになるか。一寸勘定しようか」

といふと、敏ちやんは、横にあつた棒を拾つて、土の上で運算した。一月を三

十日とみて、一日に十三錢になつた。

「ほんまにかはいさうやな」

と、私と敏ちやんが言つた。

「おばあさん。あのあんたな、よそへ奉公にいくところ、あらしまへんのか」と聞くと、

「ありまんねん。けれどもな、このだんなはんはんな、歸つたらいけまへん。内かつて用一ぱいありますよつて。と言ははりまんねん」

といつた。丁度そこへ、向ふの方から、その奥さんがきた。おばあさんはびつくりしたやうに、顔を上げて、又さげた。そして私に、

「いとさん、あの今のこと言はんといて下さいや」

といつた。私は、

「めつたに、そんなこと言はしまへんで」

といふと、おばあさんは安心したやうに、

「さいなら」

といつて歸つていつた。私達も遊びをやめて、かへることにした。二人は道々、

「ほんまにかはいさうやな。あんた一日に十三錢で、ようしんぼうするか」

「私やつたら、よそへ奉公にいくわ」

「そんなむちやなんだん。はん位なんやのん。私の勝手といつて、歸つたらええのに」

「私かてや、ほんまに、あのおばあさん、おとなしいよつて、あそこの内でも、もつてんねんけど、ほかの人やつたら、めつたにもてへんで」といつた。私は、おばあさんに同情しながら、内へと歸つた。

### 【二】正義感

啄木の歌集の中に、「何やらん、穩かならぬ目付して、鶴嘴を打つ群を見てゐる」といふのがある。啄木がこの歌をよんだのは、明治四十年頃だとしてあるから、今のやうに労働問題などの盛んでなかつた頃である。私はこの「或るおばあさん」を読んで、その中の「私」と、「何やらん、穩かならぬ目付して、鶴嘴を打つ群を見てゐる」男とが、私の心の中で結びついた。そして、作者には子供と大人の相違はあるが、相通じたもの凄いを、私は感じ

た。他家に使はれてゐる年寄が、どんな酷い目に逢つてゐようとも、さういふことは、今日のこの子供に、別に關係あることでも何でもない。うっかりすると、こんな年寄りをなぶりものにして、面白がつたりする悪戯者がないとはせぬ。しかし、時代は已に許さない。正義の心が、それだけ時代的にめざめて來てゐるのである。子供だからといつて、うっかり胡魔化せぬ強さを持つてゐる。私はこの文を読んで、今頃のプロ作家の作品を読むよりは、もつともつと新鮮な熱量を、この「或るおばあさん」に感じた。また、野望に満ちた無産黨代議士連の熱辯よりは、もつともつと眞摯な強味を感じる。丁度啄木の歌に接する感である。

### 【三】少年の魂

自分に直接な苦痛のない限り、大人の行爲に對する子供の正義感には、殆ど感情的燃焼だけで終ると思ふ。他に煽動者のない限り、その感情を實行に移して、世に對抗しようとする手段など、子供達には知られてゐない。只、父母、教師、兄姉、友人など、自分の敬愛してゐる人に話して、聞いて貰へたら、それで満足する子供の心である。腹を立て、泣く、泣く程徹底した怒かと思ふと、涙に出して終つた後では、すつかり無邪氣な表情に變つてゐた

りするところが、子供の面白さである。ところが、今時の教育者の中に、子供のかういつた正義感に對して、すぐ變な警戒線を張りたがる者が可なり多い。只も觀念的に、時代恐怖を感じて終ふのだらうが、淺間しいことだと思ふ。「或るおばあさん」を読んで、出て来る「私」の心持に、恐怖を感じたり、反感を持ったりする人はまさかなからうとは思ふが、問題にしたがつて、強ひて問題視するならば、さうならない材料ではない。綴方に限らず、級會などの場合にも、これに似た内容のことが、いくらもとんで出てくる。それを問題にして、抑壓を加へるのではなく、その考へを聞いてやり、その感情を知つてやり、さうしてそれを育てゝやるのが、教師の仕事である。そのことがすぐ争議的な實行手段に移るといふのは、問題は全く別である。

凡そ少年青年の心は、正義に對して一生に二度とない敏感期である。お互に、一度はその時期を持つたこともあるが、年をとればとる程、更にうらやましさを増すよい時期だつた。「大自然、大宗教の前に、感激出来ないやうな青年は、將來何事をもなすことの出来ない人間だ」と、私は思つてゐる。少年青年は、廢人で

ない限り、どこにあつても正義派である。人によつて強弱の差はあるにしても、氣の毒なものに同情し、不義なものを憎み、美しいものを愛し、聖いものを信ずる、その感情の全盛時代であればこそ、彼等を少年といひ、青年といふのである。それを育てようとする心を教育態度といひ、それを抑壓しようとする心を、非教育的態度といふ。今の教育界に、この非教育態度に納つた教師の何と多いことか。

【四】「あるおばあさん」に就ての問答

尙、「戒るおばあさん」の中の「私」と、その良き教師との間にとり交されさう

な問答を、想像して次にかいてみる。

子供「あのおばあさんは、なぜあんな家に辛棒してゐるのでせう」

教師「さういふおばあさんを、欲しがる家が他にないからでせう」

子供「探したら、一軒位どつかにあるか知れないでせう。あのおばあさんは、なぜ探さないのでせう」

教師「探して奉公口をとりかへようとする元氣が、おばあさんには、もうないのでせう。それよりは、苦しくてもその家でじつとしてゐたいのでせう」

子供「なぜでせう」

教師「年寄の心には、元氣が枯れてゐるからです」

子供「それなら、私等みたいな子供にまで、あんな話をして、主人の家の悪口を言はないでもよいと思ひます」

教師「それが年寄の愚痴といふものです。口で言ふほど、心では苦しがつてゐないかも知れません」

子供「――」

教師「氣の毒なおばあさんです」

子供「おばあさんは子なしですね」

教師「多分さうでせう。あつても孝行する力を持たない人であるとか何とか」

子供「あすこの旦那さんや奥さんが、なぜあのおばあさんを可愛がつて上げないでせう」

教師「働けなくなつた年寄を、安い月給で使ひたふしたり出来る人は、恐しい心です」

子供「先生があのおばあさんだつたら、どうしますか」

教師「そんなおばあさんにならない積りでゐますが、さうですね。若しなつたら、多分毎日愚痴をこぼしながら、矢張りそこで働くだらうと思ひます。あなたがおばあさんだつたら？」

子供「他につかつてくれる人がないとしたら、誰かに頼んで、もつとよけい月給もらへるやうに、してもらふと思ひます」

教師「その旦那なら多分、そんなのだつたら、出て行つてくれと言ふでせう」

子供「おばあさんが可愛さうですね」

教師「おばあさんとか、薄馬鹿とかいふやうな、世間に使ひ手の餘りない人に目をつけて、好んでさういふ人を雇ひ、少しの月給で使ひたふさうと心得たりする金持が、世の中にはよくあります。人間を牛か馬のやうにしか思へない、恐しい心の人です。氣の毒な人々だと思ひます」

子供「私がおばあさんだつたら、矢張りそんな恐しい家で、よう辛抱しません」

教師「あなたがおばあさんになる時分には、さういふ氣の毒なおばあさんもゐなく

なつてゐるでせうし、さういふ恐しい旦那も少なくなつてゐるでせう」

子供「――」

教師「人はみんな、正しいものの味方になり、正しくないものの味方にはならないやうに、だんだん心を磨きますから」

子供「あのおばあさんは、養老院へ行けばよいと思ひます」

教師「養老院へ行くより、愚痴を言ひながら、そこでさうやつて働いてゐる方が、

そのおばあさんには楽しいのかも知れません」

子供「變なおばあさんですね、先生」

教師「變なおばあさんだから、悪い人に目をつけられて、ひどい目に逢ふのです」

子供「それでも、私はあの旦那さんの方がいけないと思ひます」

教師「私も旦那の心を憎みます。しかし、その家にはまたどんな事情があるのかよく解りませんから、無暗と憎むわけには行きません。ひよつとしたら、親類であるのかも知れないし、そのおばあさんの方が、却つて厄介をかけてゐるのかも知れないし、人の家には、いろいろ込入つた事情のあるものですか

ら」

次にまた一つ、別な綴方を出して、別な問題に移ることにする。

### 【五】文例 男と女

(六年女兒)

夕御飯の後で、私は火鉢のそばに坐つた。兄さん等もきた。正造ちゃんが、

「女やつたらええなあ」

と、うらやましさに、私に言つた。私が、

「何でやのん」

といふと、正造ちゃんは、顔をしかめて、

「お前あほうやな」

といつて、私をにらみつけた。私はわけがわからないので、また、

「なんでやのん」

といふと、正造ちゃんは、

「あんな、女やつたらな、戦争にも働きにも行かへんやろ。男やつたら行かん

ならんのん、えらい損や」

といった。兄さんも女中も、みな笑つた。一番下の弟が、わけのわからないやうな顔をして、にたにた笑つてゐた。私は面白くなつて、

「正之ちゃん。あんた何面白いのん」

といった。みんなが正之ちゃんを見た。正之ちゃんは、

「ええ。何。うん。あれか、あれな、皆笑ふさかい、何や知らんけど笑へてんが」

といつて、

「えへ、えへ」

いつた。皆は又笑つた。正造ちゃんは、まじめな顔をして、

「何で皆笑ふねん。そのわけ言うてんか」

といった。兄ちゃんが、

「お前ほんまにあほうやな。大分ぬけてるわ。まぬけのからや」  
といつて、大きな聲で笑つた。私が、

「あのな、正造ちゃん。そんなに言ふけど、男に生れたら戦争にいつて、天皇陛下に忠義せんならんのに。あほうやな」  
といった。

「そんなんやつたら、女は何にもせんでもよいのんか」

その時女中が、大きいおしりを動かして、

「そのかはり、女やつたら、子を産まんならしまへんやろ」

といった。

「さうや、さうや」

といつて、私は手をたゝいた。すると、兄さんが、

「そんなことわかつたるが。男はいつでも、だんなみたいにして、女に用事いひつけてゐたらええねんが。へんどうだ。男は矢張りえらいよつてや。へんどうだ」

「何言ふねん。ずつと前な、池田先生な、人間のもとの始まりは女からや。男はな、その女の子供やて言ははつたで。元をたゞせばだ。どうだ」



と、私はいった。すると兄さんが、

「そんなんやつたら、なんで、男こんなにえらいのや。やつぱり男にちゑあるさかいぢや。そんなぼろ先生あくか」

といった。私は腹を立てた。

「それでもな、世の中がな、どうもしょうないねんで、それでな。今だけ一寸男をえらいとしてあるねんで。先生さう言はりましたで。そんでんな、もうぢつき、女でも、選挙権あるやうになりませ。えらいすみまへんな。なあはる。」

と言つて、私は女中の方を見た。兄さんは、

「お前ら勝手に、さう思てたらえゝねん」

といふと、正造ちゃんも、正之ちゃんも、

「せやく。みんなあかへん」

といつて、手をたゝいた。私はしやくにさはつたので、

「わけわからんくせに、小さい者に味方してもろて、なんや。私らな、大きな

つたら、母旦那になつて、おいあれ買うて来い。これ買うて来いと言うてやんねん。それからな、若し私がえらい人になつたらな、高野山へ女登れるやうになつたやうに、何もかもみな改正すんねん。そんな時代もうじきに來るわ」といつた。その時後の方でごろごろと音がした。ふりかへつて見ると、女中のつきえが一生懸命におしろいをぬつてゐた。私は

「やあ、あんたみたいに、やつし女居よつたらあかんわ。なんで二階でぬらへんの」

といふと、

「それでも、二階でぬつたら、かつかう悪いよつて」

といつた。私は、

「あほんだら。やつし」

といつて、一人で二階へ走つていつた。

### 【六】女の子の心

今、女の大人は、女権の意義をわきまへ、論理的に實行的に、それを主張してゐる。それが現代といふ時代の女性の立場で

ある。ところが、今から十年前の女性はずうではなかつた。先覺者は別として、一般婦人は、女である自分の立場に何か不満を感じて、家庭的社會的に、日常生活の具體的事件が癢にさはつたり、何か言つて返してやりたかつたりするやうな状態にあつた。この綴方に出てくる「私」の態度と、まづ大した差はなかつたと思ふ。私達子供の頃には「男と女」といふ問題は修身的に考へさせられたことはあつたにしても、この綴方の内容に通ふやうな意味のことは、全然考へたことはなかつたと思ふ。權力を傳統的信仰と心得させられてゐたから、それを別に不思議とは思はなかつたに違ひない。思ふことはあつても、その頃の子供心には、男と女の權力論など、どうでもよい位の縁遠いものに思つてゐたやうにも記憶する。それだけ、奴隸的根性を多分に持たせられてゐたのである。この點から考へて、今時の子供には、奴隸的根性を卑しいものと見る目が、相當にひらけて來てゐる。時代が既にさうなつて來てゐるからではあるが、十年前の女權論者あたりの論文よりは、もつとしつかりしたものをかく子供が、今の子供の中にある。この綴方は初め或る子供が、この心に通うた意味のものを綴方の材料にとつてから、急に

教室の熱となり、一しきり斯ういつた思索が、子供達の間流行した。その時に出來たものゝ一つである。前に出した「お使」の中にも、一寸かういふ心が出てゐたので、あすこでも一寸自分の指導態度は述べておいたが、中には、藝者などを材料にした、可なり深酷なものをかいたりした子供もあつた。「男と女」の中に出てくる「私」が、白粉をつける女を、一口にたゞきつけたり、自分は大人になつたら、婢旦那になつて、人を使役してやるのだといつたりするところ。正しいものゝ見方から來た態度では無論ない。結局十年前の權力争奪から來た意味のものと、同じことである。自由思想の芽生えは、大體にかういふ形をとつて生れる。

### 【七】或る意味の好意と或る意味の反感

女權論も、今では餘り男子の反感を買はなくなつたやうであるが、

十年前には、さういふ女は「新しい女」だとして、何か侮蔑を意味した取扱ひ方をされたものだつた。この頃でも、變にひねくれた反感だけはなくなつたやうだが、それかと言つて、心から興味を持つてゐる程、男子はみんなこの問題には眞面目だとは言へないが。とにかく斯ういふ問題は、前の「或るおばあさん」の問

題と同じやうに、單に或る意味からの好意、または或る意味からの反感といった、即興的な感じで裁くべきものでは決してない。具體的事件のことに捉はれるのでなく、子供達の心に、どういふ力が芽生え、どういふ血がめぐり出して來ての結果かといふ、そこを捉へて行きたいと思ふ。今時よく「母性」といふ言葉を引張り廻して、女性論の先をふせがうとする意氣込みを見せる人がある。行きつくところ、女は母に違ひないのだから、最後の目安から割出して、意見を立てることには心得のよい話には違ひない。しかし、時代が變り、人の氣持が改つて行くのに、昔のままの「母性論」を引張つて來て、それで現代女性に反省を求めようとしても、それは物笑ひとなるだけのことだと思ふ。世の中の異性が、自分の氣持の荒つぽさと、傲慢なことに氣がついたなら、そして子を育て、家を營む仕事、金を儲ける仕事より、もつと尊いものであることに氣づいて來たなら、初めて誰でも肯ける「母性論」が出ることだらうと思ふ。女權論は單なる即興的なものではない。人間の本質的要求の、當然流れるべき方向へ、流れ出した形である。私達は、當然あるべき筈の、將來の「母の生活」を、よく見極め、その上で子供達の

心を、深重に育てたいと思ふ。

【八】文例 オーバー

(五年女兒)

學校からかへつて、

「たよいま」

といつた。すると妹が、戸をあけて中の中から首をだしながら、

「ちよつと來い。えゝことや。こつちへ來よ」

といつて、ちよかちよかと、私の手をひつばつた。

「なんやねん」

といひながら、私は戸をあけて中にはいつた。見るとそこに大きな包み紙があった。そばにゐたお母さんが、私の顔を見るなり、紙づゝみを目でさして、

「これ、あきちやんのオーバー買ってやつたんやけど、どれよいやろ。見たつてんか」

といひなさつた。

「やあ、私のんとちがふのか」

私は少しいやになつた。私はかばんをおろして、そこへすはつた。そしてオーバの包みをひろげた。

「みつともないのばつかしやな。そいでも、これ一寸ええわ」

といひながら、私はらくだ色のオーバをひろげた。十一圓八十錢といふ札がつけてあつた。

「ちよつと來」

私は妹の手をひつばつて、きせてやつた。形はよかつたが、胸の所がだぶだぶしてかつかうが悪かつた。

「色よいけど、だぶだぶやな」

といつて、私は四枚あるのをみんなそこへならべた。するとお母さんが、

「これ、よいやないか」

といつて、一番のはしのを持ち上げなさつた。十二圓五十錢といふ札のついたのであつた。えりと袖口に、毛のふちがついてゐて、うしろにバンドのあるの

だつた。妹に着せてみると、ちようどよかつた。けれど形はあまり好きではなかつた。

「形いかんな」

と私はいつた。お母さんは、私の手をたゝいて、目と目との間にしわをよせて、小さな聲で、

「そんなこと言はんととき。これより良いのんで、今やつたらあらへんさかいに。そんなこと言うたら、いらんて言ははるが」

とおこりなさつた。私は小聲で、

「人のやもの、どんなんでもかまへんわ」

といつた。妹の方を見ると聞いてゐないらしかつた。私はおじやうずを言ふやうに、

「よいで、あきちゃんにこれようにあふわ」

と笑ひながらいつた。妹は、

「ほんまか。ようにあふか」

と、うれしさうな顔をした。お母さんは、

「なあ絹さん、これよいがなあ」

と私に言つて、妹のかたをオーバの上から、おさへなさつた。

「そんなら、もうこれにしとくわ」

と、妹はそれにきめた。お母さんは私に、

「そしたら絹さんな。トラ屋へいつて、これ買ふとしたら、なんぼにまけてくれはります、ていうて、まからなくて言ははつたら、ちよつと聞いてきますわ。て言うて歸つて来い。もしまけてくれはつたら、それもろて来」

といつて、そのオーバに指をさしなさつた。

「そんなややこしいことよう言はん」

と、私は苦い顔をした。けれども仕方がないので、暫くしてから、

「いつてやるわ。うるさい」

と妹のかたをたゝいた。妹も立上つた。お母さんは、オーバを皆紙につゝんで、その上をふるしきで包んで下さつた。私はそれを持つて、庭に下り、くつをは

て、妹と二人家を出た。

「お母ちやんは田舎者やよつて、もつさりしたこと言ははるな」と言ひながら私達は吉田のかどまで来た。

「せやく。こゝにもオーバ賣つたるよつて、見せたら怒らはる」

といつて、私は妹との間へ、そのつゝみをかくした。トラ屋の近くまでくる、といやな氣がして来た。

「どんなに言はう。もしまけてくれなかつたら、いりませんと言つて、置いて歸るのやな。人のことやのに、かなはんな」

と、私は一人ごとをいつた。島田さんのかどまで来た。その前がトラ屋で、オーバや服などでかざつてあつた。こゝだと思ふと、顔があつくなくて来た。中にはいつたが、もがもがして思ふことが言へなかつたが、思ひきつて、

「ごめん下さ」

と小さい聲でいつた。妹もはいつた。店の人が出て来なさつた。その人は主人らしかつた。私は胸をどきどきさせながら、包みをおいて、

「これもろとくとしたら、なんぼにまけといてくれはります」

といつて、うつむいた。その人は包みをあけて、オーバを出した。

「さあ、これやつたらなあ」

といつて、首をかたむけなさつたが、

「九圓五十銭にまけときますわ」

といひなさつた。私はふいに三圓もまけなさるので、だまされてゐるのかしらんと思つて、こはくなつた。

「これもろときますわ」

と、私はいつた。

「さうですか」

といつて、他のオーバを出して、それだけつゝんで下さつた。私は、

「餅飯殿の稲田ですが、つけといてちようだい」

といふなり、ふろしきづつみを持ち、妹の手を引つばつて、その家をとび出した。主人は、

「ようおいでやす」

と元氣な聲でいつてゐなさつた。二三げんいつた時、妹は、

「なんで手ひつばつたん」

と私に怒つた。

「それでも、あなたのオーバ買ったげるため、お母ちゃん、けつたいなこと言へて言ははるもの、これ見いさ、顔赤うなつたるやろ」

といつて、手で顔をおさへた。私は、はらが立つたので、だまつてかへつた。十二圓で三圓もまけるで、むちやくちやだと思ふと、おそろしかつた。

### 【九】新鮮な熱

何か事情のある場合は別として、十二圓の品物で三圓引きといふことは、普通ないやうに思ふ。さういふ場合大人でも無論よい氣持がしまい。しかし、さういふ商人の多い世の中に慣れてゐるだけ、商人の不正に對する怒りが、子供ほどに新鮮な熱を持たない。また大人なら、正札でない店で、品物を買ふ場合に、「値段が少しどうにかなるのか」位のことには、普通誰でも言ふ。向ふでもさう言はれることをちやんと承知の上だと思ふ。賣り手がこ

すく、出来ておれば、買手もさう甘くは出来ておない。大人は、さういつた人情をちやんと呑込んで、人と交渉する。ところが、子供の心にはその下地がない。無垢で正直一方、人を疑ふやうな氣持がない。特別なのは例外だが。だから、普通ありさうにないことが起ると、甚く驚いたり、非常に腹を立てたりする。子供達の喜怒哀樂の情は、常に新鮮な熱を持つ。それだけに彼等には胡魔化しが利かない。社會の習慣に慣れて終つてゐる大人とは、その心持が餘程違ふ。子供の心は、恰も熱烈な革命兒が道を歩むに似てゐる。故意に厭がつたり、理屈をつけたがたりするのではない。日常一々のことが、彼等の淨い鏡に、眞直ぐに影を映すのである。この作品についてみても、母親に對して、

「お母さんは田舎者やよつて、もつさりしたこと言ははるなア」と言ひながら私達は吉田のかどまで来た。

と言つてゐる「私」の言葉と、また商人に對して、

私は、ふいに三圓もまけなさるので、だまされてゐるのか知らんと思つて、こはくなつた。

と言つてゐる言葉が、非常に強く響く。さうして、言ひにくいことを言ひ、破格なまけ方をしてもらつて、眞赤な顔になり、妹の手を引張つて、怖々家へ歸つて行く少女の姿が、いかにもといふ感がする。新鮮な熱こそ、伸びる心の寶である。

### 【10】怒

「或るおばあさん」にしても、「男と女」にしても、「オーバー」にしても、子供は常に正しく怒つて、妥協性を持たない。妥協性のない正しい怒には、常に未來が輝いてゐる。自分を強いもの、正しいものの位置において、先へ先へと裁いて行かうとする、潑刺とした氣力を藏してゐる。この怒こそ、神の怒であり、聖者の怒である。大人は歳とともに、神の怒をだんだんに忘れ、安逸へ安逸へと、俗化して行く。さうして俗惡な人間となり、遂には自分の俗惡さにさへ氣がつかずに死んで終ふ。淺間しいことだと思ふ。無論人間は神ではない。しかし、日々の我が行爲を我が心の殿堂から監視してゐる心の主は、神である。神の怒と神の笑を持つた心の主は、今もこの私の行爲を監視してゐるではないか。我に尊きこの心あるを、人間は神でないぞと、どここの馬鹿者が曰ふ。人間は神ではない。然り神ではない。しかも神心を失つた胴體の、いかに淺ましく淋しい影

であることか。教育の仕事がなぜ尊いか。日々に、子供達のこの怒を聞き、この笑を見ることが出来る幸福を持つからである。教育を日々の仕事にしながら、この怒と笑に、人生の幸福を感じられないやうな人は、已に將來のない人間だと思ふ。

### 【二】指導の要領

と言つて、子供に對して、教師は無茶苦茶に感激してはならぬと思ふ。綴方の時間になると、かういふ材料は絶えず出てくるが、作者の発表が済んだ後の、子供同志の談話的批評が、よくよくもつれ込んで来ない限り、私は滅多と口入れしないことに心得てゐた。心では感心して居り、心では賞めてゐても、心得てそれは言はぬことにしてゐた。うっかり感心を口に出したりすると、感情に燃え易い彼等は、有頂天になつて埒を外したりするからである。「或るおばあさん」を読み聞かされて、教師は子供の正義感に感動しても、子供は自分を正義派だとも、それが名譽なことだとも何とも考へてゐはしない。只、さういふ老人への同情だけが子供の心に存在してゐるだけのことである。だから教師の方で、うっかり賞めちぎつたりすると、無垢なその所感に

善悪の評価を與へることになる。行爲に善悪の評価をつけると、子供は策士になる。斯うして賞められよう。あゝして賞められようと心を配るやうになる。さうなつたら、教育はお終ひである。徹頭徹尾、綴方指導者の態度をもつて、子供の心の動きを靜かに眺めて行きたい。力ある文なら、教師が飛んで出て賞めちぎつたりしなくとも、聞いてゐる子供みんなに、その力が及ぶ。先刻「或るおばあさん」に就いての問答のところ、教師の態度について具體的に述べておいた。必要に応じて話す場合には、あの態度で出たいと思ふ。どこまでも文章の内容を中心にして進むこと。内容から離れて、この子は斯ういふ場合に、かういふ考へ方をしたのはよいとか、この子はこの人に對して斯うしてあげたのがよいとか、さういつた善悪評価は、止むを得ない場合の外はさけてゐたいと思ふ。自惚は困る。卑屈は更に困る。正々堂々、正しい道を正しく歩むことの愉快を、常に味はせてゐたいと思ふ。



第十講 境遇と子供 (二)

【二】文例

前項では、境遇に對する子供の強さに就いて述べた。本項では、それとは反對な、子供の弱さに就いて、述べてみることにする。

女 中

(六年女兒)

一

「私わたしの方がええで」

「私わたしの方がええで」

と、弟と妹と三人で、繪葉書を見ながら歸つて來た。すると、どつか親類か知り合の人かららしい五十二三のおばあさんが、首まきを手に持つて、お父さんにおじ儀をして居た。私が、

「お出でやす」

と言ふと、

「おう、今お歸りですか」

と、太い聲で言つた。

「えへへ」

と私は笑つた。

「これ此所の嬢いぢやで」

とその人が言つた。

「どうかよろしく」

と、そばで立つて居た十八九の田舎の娘さんの様な、かつかうをした人が、私に言つた。私はだまつてお禮をした。その娘さんは、私の頭の上から足の先まで、身體に穴があく程見て、につと笑つた。その人はキルクの草履をはいた、頬のもり上つた、目の細い人であつた。キルクの草履をはいては居たが、ほんとの田舎から來た様な人であつた。

「どうぞお上り」

と言つて、お父さんはすすめて居られた。私達は奥へはいつた。

「姉ちゃん。あれな、此の間から女中來るて言つてはつたん、あの娘はんやな」

と妹が言った。それからまた、

「一寸おとなしさを顔つきやな」と言った。

「女中やつたら、此所の家むさくるしい家や、掃除此のくらいにして置いたらええねん、と思つたら悪いさかいに、美しく片づけとかへんか」

と、私は相談した。それから、一生懸命に二階を片づけた。下へ下りて来て、火鉢の横へ坐つた。お母さんは、向ふの家から歸つて來られた。そして、私のそばに来て、さつきの娘に、

「あなたの名前なんと云ふのんですか」と聞いた。

「私の名春江と申します」

と言つた。

「あれ春どんやな」

と、私は一人言を言つた。

「お前東京庵に電話かけて」

と、お父さんが私におつしやつた。

「何注文」

「むし二つ」

私らどうなるのん見物か。と思ひながら、私は電話をかけた。それから、氣てんをきかして、奥へは入つた。

「あの人きつちり者で、きれい好きやつたらええけれども、どうらく者やつたら、怒らんならん」

と言つて、私達は話してゐた。それから春は、かつぼう前かけをして、働いてゐた。御飯をたいたり、色々の臺所の用事してゐた。

二

私と弟が、火鉢の端にすはつて居た。

「此の頃春はな、私にな。これしてんか。あれして下はれんか」て言ひよるで、

どうもしょう無い様になつてしまつてんで。始め家へ来た時には、おとなしさうな顔をして、今になつてえらさうにしてるねんで」

と、私が言つた。

「さうや、春どんな、これしてんかて言ひつけたら、ぼやく様な顔しよるんやで」

「髪ゆうてたらな、二つに分けやんでも、一つにあんでおかはつたらよろしはんねが、て、えらさうに言ふねんで」

「あのな僕にかてな、あんたそんなことしたら、あかしめへんが、てえらさうに言ふで。あいつ悪い娘やで」

と、弟は寒さうなかつかうをして言つた。

「一ぺんおさえ込みしてやつたらえゝねん。腹のたつやつやで」

その時春が歸つて來た。

「一寸あいつの歩き方世界第一位でござるぞ。チョンコ、チョンコ、チョンコ、チョンコと歩いて。なんてまんが悪いんでせう。これから春と言はんと、チヨ

ンコチョンコにしたらよいねん」

と、弟が小さい聲で言つた。

「あいつの顔見てみ。猿と言つたらえゝのんか、おたふくと言つたらえゝのんか、わからへん。頬べつたの盛り上つた、目の糸より細い。細いて言うたら、きりのない程の顔してる」

春は臺所へはいつて、また出て來て、

「今日もすみまへんが、おひつあつちへ持つて行つてちやうだい。毎度えらいすみまへんな」

と私に言つた。さうなつたら、どうもしやうが無い。

「ふんふ」

といつて、私は持つて家を出た。途中で重たくなつてきた。おひつごと放つて歸つてやらうかと思つた。あつちの家へ行くと、お母さんが、なんだかやいや言つて居られた。

「なにやのん」

と私は言つた。

「ちつと氣つけさせんとあかんわ。鍋に一寸水入れといて、きつい火でたいて、ほつといて、来てみて取らうと思たら、あつうてあつうて」とお母さんが言つた。

「春は、なんし自分だけよかつたらよいと言ふ氣やねんで」と言ふと、

「ふふん」

と言つて、お母さんは笑つて居られた。

「お使ひに行くるぜ」

と言つて、お母さんが出て行かれた。姉さんは次の間で寐て居なかつた。私一人が火鉢の傍で手をあぶつて居た。一人だから淋しい。

「何か食べる物でもあつたら食べよう」

と、一人ごとを言ひながら、私は火鉢の引出しを引いた。茶があつた。もう一つの引出しを引くと、菓子があつた。

「一つ食べよ」

と言つてつまんだ。こり／＼と大きい音がした。次の間にゐる姉さんに、見つけられると怒られるので、たべるのを止めた。そんなに食べたくもなかつた。横を見ると、雑誌があつた。見たくなかつた。そのそばに、煙草があつた。

「やあ煙草すうてみよ」

と言ひながら、私はきせるをぬいた。見てもからさうである。きせるを取り出して、きざみの中につめた。火をつけて、こはごは一口すうた。すうつと煙が口の中へはいつて來た。ごほんごほんとききが出て、からいと言つてよいか、にがいと言つてよいか、わからないものが、のどにひつかゝつた。こはごは又一口すうた。ごほんごほんとききをした。もうのまなひと思つた。コトントンと、きせるを火鉢のふちでたゝいた。

ガラガラといつたかと思ふと、春がはいつて來てゐた。私は、すつと煙草をかくした。春はえらさうに、奥様のやうに火鉢にあたりに來て、  
「あんた御飯食べに歸らはらへんの」

と言つた。

「そら人間やもの、學校から歸つて何にも食べへんもん、お腹はらべこべこのこときまつてる」

と、私は鼻をふくらませて、えらさうに言つてやつた。

「ああ、あんた煙草すははつたな」

と、春が言つた。私はだまつてゐた。

「えらい、かざしてる」

と、又言つた。

三

夕飯を食べてから向ふの家へ行つた。ガラガラと硝子戸を開けると、男物のこげ茶のはなをのついた下駄が、玄關に美しく、前向きに列べてあつた。

「これはお客さん居やはんねんな」

と思ひながら、中へはいつた。そこには毎時も來なさるお客さんがゐた。

「おいでやす」

といつて坐つて、一つべこつと禮をした。お客さんは、

「やあ」

と言つた。客は二階へ上つて行きなさつた。二階では、外のお客さんが、一組ゐなさるらしかつた。三味線の音がしてゐた。

「お箸出してちやうだい」

と、お母さんが言つて來た。

「はい」

と言つてあみ戸棚を開けた。すると其所に、サイダーのびんがあつた。誰かど半分程のんだあと、一寸残つて居た。夕飯を少し食べすぎてゐたので。お腹が大きかつた。

「これで一寸お腹をすかそか」

と言つて、私はクーとそれをのんだ。

「ウーッ」

と、口の中にふくんで言った。すい、からい、味のものだつた。普通のサイダーとはちがつてゐた。

「何してんの、壽賀ちゃん」

とお母さんが言った。私は、箸を二本疊の上へ置いて、すぐ庭へ下りた。はあと、はき出すと、何が何かわからないほどいやな気がした。一口のんだ。毒か薬かわからない。いやらしいげつぶが上つて来た。

「何やるあれ」

と一人ごとをいつた。せやせや。毒やつてきつかつたらいかん。胃で熱が起つたり、唾液と一しよになつて、こなされにくかつたりすると悪い。水まはそ。と思つて、水をのんだ。

「はあ〜〜」

と言つた。口の中に、熱が起つたやうに、びりびりした。

「もし毒やつたらどうしよう。お母ちゃんに言うたら、怒られるのにきまつてゐる」

なんだか、胃の中が今あばれ出して来るのだつたら、どうしようか、と、心配でならなかつた。それで春にいつた。春は、

「あほだんな。あんなもの、あれサイダーと違ひまんが」

と、あざけり笑ふやうに言った。それから家へ歸つた。兄さんに言ふと、

「あれ酢や。僕かて飲まうかしらんと思つてたら、お母ちゃんが、それ酢やさかい、飲まんとき、と言ははつたさかいに、よかつたんや」

と言つた。そこへ、チョンコチョンコと音がしたと思ふと、春が歸つて来た。それで、話をやめてしまつた。

### 【三】特殊なもの

この「女中」は、今迄出して来たいろいろの文とは、その形が少々變つてゐる。形が變つてゐるだけに、無論内容も變つてゐる。普通子供の作る文は、大抵一定の時間内に起つた或る事件、或る出来事のやうである。それを書くにしても、内容の取捨選擇をした上で一つの文にまとめるやうになるのは、まづ五年生位からのことで、それまでは大概、その事件を頭から時間的に順々に書きつけて行くものである。この文のやうに、相當に長い

時間の間の出来ごとの中から、相通じた個々の材料を抜出して、それをまとめて一つの文にするといふやうな計畫は、一寸珍しい。六年生にもなると、かういふ傾向のものには出る。しかし、大概は、さうして内容を繼ぎ足し、文章を長くする位の程度のもので、それ以上には一寸進みにくいやうである。その標準から見ると、この「女中」は、可なり進んだものだと思ふ。女中が来た日のことからかき起して、だんだんに住み慣れ、腰が据つて来たところまでのことをかいてゐるのだが、その觀察振りは、却々單純ではない。普通の子供なら、單に女中のことばつかりかくかも知れない。そこを、「私」の行爲、「私の家」を背景にして、ぼつんぼつんと女中のことを出して、そして立派に「女中」にまとめてゐる。かういふ計畫は、心境がかなり進んで来てからでないといふ、一寸出来ないのである。これは六年生の後期の作であるが、發育の早い方である。

### 【三】家庭の影響

さて、初めて女中が来た日のこと、家の中を取り散しておいては、何時もこの位の程度に掃除すればよいのだと、女中に思ひ込ませてはならぬといふので、妹達を率ゐて家の掃除をするあたりの心遣ひ

は、最早や、あどけない子供の仕草ではない。母親が沸騰した鍋の蓋をとりながら、怒つてゐる處へはいつていつて、女中の批評をするあたり、「一べんおさえ込みしてやらなあかん」と口説いてゐるあたり、いつかどの主婦氣取りになつてゐる様子が見える。使用人に對して要求してゐるものが、世智辛いといへば世智辛い。とにかくませてゐる。初めて逢つた女中への觀察ぶりからみても、かういふ常識の長け方は、子供の個性からといふのではなく、家庭の影響から來てゐるやうに思はれる。

夕飯を食べてから、向ふの家へ行つた。

ガラガラと硝子戸をあけると、男物のこげ茶のはなをのついた下駄が、玄關に美しく、前向きに列べてあつた。

「これはお客さんひやはんねんな」

と思ひながら、中へはいつた。そこには、何時も來なさるお客さんが居た。

「おいでやす」

とらつて坐つて、一つべこつと禮をした。お客さんは、



「やあ」

と言つた。客は二階へ上つて行きなかつた。二階では、外のお客さんが一組ひなさるらしかつた。三味線の音がしてゐた。

といふのを見ても解る通り、この子供の家では、母親が別に料理屋を經營してゐるのである。そこで女中が来た日のこと、

「お前、東京庵へ電話かけて」

と、父親がこの子供にいひつけ、「むし二つ」を注文する。

「私らどうなるのん、見物か」

と思ひながら、私は電話をかけた。それからきてんをきかして、奥へはいつた。といふ、心遣ひも、普通の子供としては随分ませた氣がするが、さういふ家庭を背景にしてみると、そのことが少しも不自然な感を持たせない。

母親が留守になり、姉が次の間で眠つてゐる。その時「私」が、火鉢の引出しをぬいて、菓子をつまみ喰ひをし、煙草をのんでみるといふあたり、箸を出しに行つて、サイダー瓶にはいつてゐた酢を、サイダーと間違へて盗みのみをすると

いふあたりなども、普通の家庭の子供だと、随分いやな子供に見えるが、かういふ家庭を背景にしてみると、それ程目立つたことではなく、かういふ家庭では普通ありさうな場面に思へる。

私はこの綴方を讀んで、つくづくさう思つた。影響といふことは、こんなに恐ろしいものである。お互に、影響されてゐるとか、影響してゐるとかいふ意識は何もなしに、實に平和の中に、色の染上げが出来上つて行くのである。學級經營、學校經營、なども、全くこれと同じ法則の中にあることを思ひたい。何といつても、教育は理論でも方法でもない。影響とか教育とかいふ意識なしに、影響し教育して行くのが、眞の教育である。と同時に、眞の非教育ともなる。校風、級風の力は恐ろしい。理論をぬきにした教師自身の人格が、とにかくにも教育の柱であることは、今更言ふも愚な氣がする。しかし、今の教育界は、この底力を失つた廢園に、理論の雜草が繁茂してゐる形なのではあるまいか。それを思ふと、教育の文明化ほど、恐ろしいことはない氣がする。

さて、前項で述べたやうに、子供は、境遇に當る強い力をも持つが、またかう

いつた弱い力をも持つてゐるのである。別に子供に限つたことではなく、われわれ大人も無論さうではあるが。しかし、發育中にある子供ほど、この弱い力、つまり被影響性が強い。教師は、子供のこの特質を堅實につかまへたいと思ふ。この特質を堅實につかまへてかゝりさへすれば、感化は自然に及ぶ。一切は、無言の感化である。私がこの書物の初めに、特に「教室の気分」「子供の氣品」といふ二項を設けた理由はその心にある。この項の意志と結合して読んで貰へば、私の教育精神が、よく解つて貰へると思ふ。

#### 【四】苦笑の教育

指導の要領として、徹頭徹尾、綴方指導の立場から、といふもつた内容のものには、その注意が特に必要である。殊にかういふ家庭的な背景を言行に對して、無暗と道徳的批判を下したりなどすることは、心得ふべきである。前項の「指導要領」で述べた通り、さういふ内部的な事情に立入るのではなく、徹頭徹尾一つの綴方、つまり文章として取扱ひたいと思ふ。文章としての立場から行けば、作者自身が、出てくる「私」をかばひたがつたり「私」に疵をつけら

れることを甚く恐れたりする感が、文章を仲介物にしてゐるだけ、それだけ直接でない。母親の留守の間に菓子を喰べ、煙草を吸うてみたり、サイダーを酢と間違へて飲んだりすることを、文章をぬきにして、只道徳批判からのみ押さうとすると、随分いやな行爲になる。しかし、あの文章を通して「私」を見ると、いやといふ感が起らないで、煙草の香を女中にかぎつけられたり、酢をサイダーと間違へて、毒ではないかと水を飲んだり、女中にやりこめられたりする場面が続いて出てくるので、却つて面白い皮肉となる。その結果が、一々、女中への反感の種となるのでは、どうかと思ふが、子供自身の反省に、これ以上別な道徳批判をつゝ込んで行かなければならない必要は、どこにもないと思ふ。とにかくにも、直接な道徳批判といふものは、教育上甚だ無意味な場合が多い。むしろ、相手の心を隠劍にする場合が多い。その點、綴方教育に志すものは、その不心得を多くしない幸福を持つ。綴方教育者は、感化の中の成長を楽しみ、苦笑の中の反省をこよなく尊ぶ。文章に現はれた「私」には、客観性が強い。自分のことを批判されながら、狭い客観に捉はれない氣輕さがある。氣輕い所では、怒りが苦笑にか

はる。怒りは反抗を産み、苦笑は自己省察を深める。綴方教育者の見る世界はそこである。自分の生活の中から苦笑を探し出させる。自分の生活を見て苦笑の出来るやうな心になれる。綴方教育の仕事の一つはそこにある。さうして、だんだんに、自分から感得して、自己省察を深めて行くやうに導きたい。つまり暗示をもつてしたい。かういふ作品に對する指導の要領は、それだと思ふ。

【五】文例 お茶當番

(五年女兒)

お晝のお茶をもらひにゆく當番が、私と藤居さんのまはりになつた日であつた。月曜日にあたつてゐた。これで晝といふ授業の時、私と藤居さんは、先生の話も聞かずに、

「はよいつて、四つもろて來う」

「よつしや」

「そしてみ、小使さんが、たん、と持つていつたらいかんと言うて、怒らはるさかん、私とあんなと、綴ちがふやうな顔して行こ」

「ふんふん。私大きいのと小さいのと取るわ」と、二人はこそ／＼お話をした。

「早よリンなつたら、とんで行くのにな」

「ほんまに、そしたらとんで行つたるのに」

といつて、リンのなるのを待つた。

デヤンデヤンデヤンデヤンとリンがなつた。

「やあ早よ行こ」

と二人は言つたが、先生は、しかけてゐる話を止めなさらなかつた。

「やあ早よ止めてほしな」

と思つたが、先生は何やらぐじや／＼話して止めなさらなかつた。私は氣がせいてたまらなかつた。藤居さんは、片手に湯のみを持つて、

「關こ。あのな。わしお茶もらひにいつたら、すぐ手洗ふつもりで、もう、コブツ持つてるねんで」とおつしやつた。

「そや。早よいこ」

と私は言つた。そのとき、

「さ、今日はこれでおいといて、おれい致しませう」

と先生がおつしやつて、立ちなさつた。

「あ、うれし」

先生は、

「はい、おれい」

とおつしやつて、頭を下げなさつた。私は、そまづにさつと頭をさげて、とび出ようとする、先生が、

「や今日のお茶當番」

とよびなさつた。

「私」

といつて、二人は手をあげた。先生は、

「あのどんぶり、私のもろて来て下さい」

とおつしやつた。

「はい」

と言つて、二人はすぐ教室を出て、かいだんをとび下りた。三年の教室の前をとほると、女の子や男の子が一ばいゐた。

「や、ごめん」

といひながら、そこをのけて、小使さんのところへ行つた。

「ちよつと、池田先生のどんぶり」

と、私が言ふと、おちさんの方の小使さんが、

「は、これ」

と言つて、箱にはいつたどんぶりをくれた。それから先生のおぼんをとつた。すると小使さんは、

「あ、ちよつとちよつと。あんたそれ持つて行かんといてくだはれ」といつた。

「なんでやの」

「あの池田先生はな、そんなぬれたおぼん持つて行つたら、おこらはりまんね」  
「さう」

私は、ぬれてないのを取りかへて、それから、大きなやくわんと小さいやくわんをさげたが、重たくて持てなかつた。そこへ、松本さんが來なさつた。松本さんは、

「關こ、持つてやるか」

といった。

「よつしや。これ持つて行といて」

といつて、私は、どんぶりとおぼんを松本さんに渡した。松本さんは、先に持つて行きなさつた。そこへ藤居さんが來なさつた。藤居さんは、

「あのな關こ。あの鬼みたいな小使さんなゐらるやろ、あいつな、二つも持つて行つたらいかんて言ひよるさかいに、一つとつて來ただけやねん」と言つた。

「さう、わしら、たんと取つておかな、かなはんと思つて、二つ持つて來た」

と言つて、両手にぶらさげてゐたやくわんをみせた。

「早よいこ」

といつて、二人は、かいだんをのぼり、ろうかを走つて、

「がらつ」

と教室の戸をあけた。そのとき先生は、もうどんぶりをたべていらつしやつた。やくわんを教だんの上のせて、私は手を洗ひに、又外へ出た。あとから藤居さんも來なさつた。二人は手をあらつて、すぐ教室へいつて、ごはんをたべはじめた。

### 【六】罪の出所

この綴方を讀み聞かされたとき、面白いやら、氣の毒なやらで、私は思はず顔を紅くした。學校では、人数の少い組には、小さい薬罐二つ、大勢の組には大きいのを二つと決めてゐるのだつた。初め各組々の名札をつけ、そのことを納得させられてゐた頃には、それで別段何事もなかつたやうだつた。ところが、或る頃、職員會議のときに、授業の終りが遅くなつて、茶をもらひに行き遅れると、薬罐がなくて困ることがあるといふ話が、出たこと

があつた。どこかに、規定より餘計持つて行く組があるから、當然さうなることは、わかつてゐた。しかし私は、自分の子供達にそんなことをするのはゐないと信じ切つてゐたから、そのことには氣をとめなかつた。ところが、この綴方を見ると、授業のすむのを待ちかねて、とんで行つてとつてくる様子が、いかにもありありと書かれてゐる。これは、と思つて、私は子供達にそのわけを聞いてみた。なる程私の組は、學校中で一番人数の多い組で、他の組なみに、大きなのを二つもらつただけでは、常に不足してゐたことが、その原因だつたことがわかつた。しかし定つた時には、私も子供達もそのことには氣がつかなかつた。子供達は長いこと、足りなければもう一度小使室まで茶を入れて行つて来て、それで需要を満してゐたのだつた。ところが、さうすることが非常に面倒で、當番に當つたものは、食事中に何邊でも席を立たなければならぬことになる。私には解らなかつたが、そのことが可なり子供達を厭がらせてゐたのださうだつた。そのうちに、だんだんに藥罐の名札がとれ、どれがどの組のものだか解らなくなつた。そこで何時の間にか、この「お茶當番」のやうな不始末が出来てしまつたものらしくつ

た。この子供が、この綴方を讀んだ時、私にその事情がよく解らなかつたので、「そりや一體どういふこと？」

と、私は子供の顔を見た。「お茶當番」には、私自身のことにもかゝれてゐるし、その場面も相當面白く出てゐたので、私の顔には笑が含まれてゐたことは言ふまでもない。子供達はみんな私の顔を見て、聲をそろへて笑つた。そして、

「それはねえ先生」

といつた調子で、先刻から話したやうな事情を、話し出した。

「さう、そりや長いこと氣の毒しましたね」

と私は言つた。そして、共同生活の中では、さういふ場合に、どういふ方法をとるのが一番よからうかと、聞いてみた。子供達は、自分達の困る時には、それをそのままにしないで、これでは困るといふ事情を先生に話して、困らないやうにして貰へばよいのだと、何の苦もなしに答へた。平生さういふことの言へない子供達でもないのに何故さういふことになつたのだらうかと、私は一寸不思議に思つた。察したところ、その行爲を悪いことだと思ふより以上に、そのことを面白

がつてやつたものらしかった。鬼のやうな小使をだまして、とつて來ることも面白しい、早くいつて、數より餘計持つて來ることも面白かつたものらしかった。聞いてゐて、いかにもさうらしい子供達の心を眺めて、私も笑つて終つたことだつた。

大人の犯罪も多くかうした境遇の不整理（不遇）から來ることは、無論であるが、大人の場合だと、罪といふ意識がちやんと出來てゐる。子供といつても、五年生にもなれば、さういふことに氣づかないわけではない。しかし、子供にはまた別な興味がある。悪いことだと知りつゝ、悪いことをしてゐるのではなく、面白がつてやつてゐることが、悪いことになつて終つてゐる場合がいくらかもあると思ふ。この點、生活境遇の整理といふことは細心な注意が要る。

### 【七】苦状の多い道德批判

その週の職員會議の時だつた。私はその綴方の話をして、その犯罪者が自分の組であつたことを言ひ、藥罐の數を増して貰ひたいことを言つた。本當を言へば、藥罐の數を増したりする位のことを、何も會議などで話さなくてもよいので、係にさういつて、増

せばそれでよい話である。ところが私の心には、子供の心境に對する別な興味があつた。その興味から、それを話したのであつた。ところが、淋しいことに私のその興味を共に興がつてくれるのではなくて、それがその場で道德問題として取扱はれ、結局はさういふ子供を出したのは、教師の不注意だといふ工合な話になつた。

「馬鹿野郎！」

と私は心で叫んだ。ことの解らぬ田舎の學校ならいざ知らず、堂々たる國家教育の機關學校に、かくも多く無理解者がゐようとは。彼等の心には、心境らしいものが出來てもゐない。出來てゐないからこそ、人の心境がわからないのだ。彼等は何を教育と思ひ、何を道德と心得てゐるのだらう。私は腹を立てた。しかしそのことはそれとして、私は別に反抗はしなかつた。しないだけに、私の心の中には、「餘りに解りすぎたこと」といふ自信があつた。その時の感情は、ちぎりに消えて、別段誰にも反感は持たなかつた。しかし、皮肉な思出として、今もそのことが記憶の中にある。世に道德一天張りより外、ことのわからない者の苦情ほど、

うるさいものはないと思ふ。

【八】文例 勉強室

(五年女兒)

お母さんが裁ち物をしてゐるそばで、私は言ひ出した。

「お母ちゃん、勉強室こしらへてんか」

「なんでやね」

「あや子さんな、にかいの奥の間、こいさんと二人の勉強室にもらひましてん  
わ」

「そらお金持やもん」

「私、なんでこんな、わけのわからんお母さん持つてんやろ」

「えらさうに、何言うてるねん。そんなら、お前この裁ち物ようするか」

「するが。おせてくれたら」

「あほらしなるわ」

お母さんは、ちよきちよきと、心よささうに、布を切つてゐなさつた。

「お母ちゃん、よいこと、おしへて上げよ」

「なんや。又お母さんはきゆうへいて言ふこと、聞かせてくれるのんか」

「いゝや。そらよいことやで」

「どんなこつちやねん」

「あのな、先生な、そんな年よりのお母さん持つたのを、いんがと思へて、言  
ははつてんで」

「はゝん。先生、ろくなことおせてくれはらへんのやな」

と、お母さんは、ちよつと笑はれた。

「そんなことないねんけどな」

と、私はちよつと、先生にすまないやうな氣がした。

「私そんなに、年よりけ」

「いや、そんなことないねんけどな。こないだな、みんなお母さんといふものはどこのんでも、しぶちんやて言ははつてんが。そしたら先生な、いやそれは、年よりと言ふものは、金をほしがるもんやて。言ははつてん。そしてな、そん



な年よりのお母さん持ったのを、いんがと思つて、勉強なさいて言うて、みんなを笑はせはつてん」

「はゝん。そんなこと先生におせ、てもろて來たら、お母さんもむちややがな」と、お母さんは笑はれた。そこへ姉さんが來て、

「なんだんの」

と言つた。するとお母さんが、

「あのな。先生がな、こんな年よりのお母さん持ったのをいんがと思つて勉強なさいと、言ははつたんや」

と、姉さんに言つた。

「はゝん。女高師の先生、えらいことおせてくれまんねな。學用品にさへ、きうきう言うてるくらゐの家の子供に、そんなことおせてくれて」

「しかしな。姉ちゃんら、きんしやの着物したかて二十圓もするくせに、うちの洋服やつたら、ちびつて一つも買うてくれんと。どうや、先生の言ははるかと、ほんとやないか」

と、私はじまんをした。お母さんはすまして、話を聞いてゐなかつた。

「そんなことより、なんで書方もつとしつかりおせてもろて來やへんの」と、姉さんが言つた。

「ないや。ないや」

「なにが」

「そんな時間が」

「おまへとこの時間割、そんならいつといつと書方あるねん」

「土曜」

「それ一べんけ」

と、お母さんは目をまるくして、裁ち物をしてゐたのをやめて、おつしやつた。

「高い學用品で言ふけどな、一ヶ月に二十錢やないか」

と、私は姉さんに言ふと、姉さんはへんな顔つきをして、

「せやせや。まちがひ。後援會の金や」

「そのかはり、運動會の日、お菓子はくれるし、また、それ出すだけ、この子

にそれだけの、ねうちがついてゐる」  
と、お母さんが私の方を指さした。

「それはさうと、勉強室こさへてさ」

と、私は言つた。お母さんは、うるささうに、

「そんなら先生に、勉強室なければ、勉強出来るのか、聞いてからこさへて上げよ」

と言つて、よこを向いてしまつた。姉さんは腰を上げて、

「あつさり、いかれてんが」

と言つて、奥へはいつて行かれた。

「先生な、勉強室どんなせばい家でも、こしらへてもらへて言ははつたんか」  
「いゝや。せやけど、『あや子さん』と言ふやろが。そしたら『何』と言つて出てきて、『にかいへ行こ』と言うて、つれて行かれてみ、どんなにくやしいか」

「そら金持やもん」

「そねん言ふけど」

と言つて、私はつまつた。腹がたつて、目になみだがたまつて来た。

「もうあきらめた。よいしよ」

と言つて、私はそこをたつて、關さんのうちへ行つた。

「またにかいへつれて行かはらへんやろか。行かはつたらかなはんな」  
と思ひながら、そこからよんだ。

「どこへいこ」

「雨ふつてるさかいにな」

「ふん、今にかいで、からめるやいてるさかいに、行こ」

「ひやあ、またか」

と思つた。私はしかたなしに、かいだんをのぼつた。のぼると、あまいかざがして来た。二階に上ると、

「だれやと思たらさるか」

と、十ぼん（十郎坊つちやんのこと）がおつしやつた。横にびようぶが立て、あつて、机には、らしやの緑の机かけがさがつてゐた。そして机の上には、は

かた人形と、花とがかさつてあつた。またよけいに、私も勉強室がほしくなつてきた。

「私もこんなところで勉強したいな」

と思ひく、私は机かけをぢつと見つめてゐた。

### 帽子の生地

(六年女兒)

裁縫の材料がなくなつたので、火鉢にあたりながら、お母さんに、

「私明日裁縫あるの、何しよう」

と言ふと、お母さんは、にこ／＼しながら、

「帽子はどう？去年のをほどこいて、きれいに洗つといたから、それを裏がへして」とおつしやつた。去年の古と聞いて、むつとしたが、なんだかやつぱりうれしかつた。此の間今西さんが、煉瓦色のよい帽子を皆に見せびらかして、作つてゐなかつたことを思ひ出すと、みな、私の作つてゐるのを見に来なさるかもしれないと思ひ、わく／＼した氣持になつてきた。

「早よ出してんか。ええ、早く出してほしいわあ」

と、お母さんをせきたてた。お母さんはうるささうにしてゐなかつたが、立つて、長持の上の行李をひらいてゐなかつた。しばらくして出して來なかつたのを見ると、それは日にやけて、うす茶色に丸くこげてゐた。でも裏はきれいだった。

そのあくる日だった。ほんの此の間までは、あみ物だったので、裁縫箱へ入れないで、いつもかばんの中へ入れて行つたのに、その日は、裁縫箱を、ふつくりふくらまして、學校へ行つた。學習時間も、ほかの學習をするのがいやで裁縫に行きたかつた。けれども外の人は皆よく落ちついて勉強してゐなかつた。私、人裁縫に行くのもわるいと思つた。氣がいらついで、よけい行きたくなつた。誰か裁縫に行く人ないかしらんと見わたしたが、誰も行きさうになかつた。思ひきつて一人で行つた。裁縫室では、實科の人が澤山絹物などを、縫つてゐなかつた。私は一番前の机にすはつて、ふるしきをといた。中澤先生が來られたので、先生にひだの取り方をおそはつて、ひただけをとつて、學習時間は終

つた。自由体操の時に、今西さんに。

「私わたしかて、あんたみたいなの帽子縫ぬふねん」

といった。今西さんは、にや／＼笑ひながら、

「やあさう。どんなん。えゝのんか」

と、せきこんでたづねなさつた。私は少しこまつた。

「私わたしええのんとちがふ。去年のほどいてしなほすねん」

今西さんは、さつきの笑ひ顔をふくれ顔にして、目を丸くして、

「やあさう。古か。私のんみたいなの、ええのんとちがふの。なんのこつちや」と言ひなさつた。私はむつとした。

「あの人、自分のよいと言つてうぬぼれてゐやはる。うぬぼれもんやなあ。自分のよつぽどよいと思つていばつてんねん。私ら、なんぼそんなに思つても、よう口に出さんわ」

と、私はぶん／＼しながら、加藤さんに話した。

「なんや、あの人いばつてるの。へん、ちくりんなの作つてゐながら」

と、いつて笑つてゐなさつた。やがて裁縫の時間が来たので、よろこんで、一番に裁縫室にとびこんだ。うれしくて、先生がまだ来なさらないので、ふろしきをといて、縫ひ始めた。すると、今西さんが横から首をつき出して、

「なんや、それか。ふうん」

といかにもけいべつした様に言ひなさつた。今度は、前から松本さんが、

「これで何するのん」

といつて帽子の切れをいらひなさつた。私は松本さんも、

「これで何するの。あほみたいなもの。いやらし」

と、言ひさうに思つて、腹がたつたが、私は、

「何や、人の言ふことぐらゐで負けてゐるか。きつと、きれいに仕上げて、かぶつて見せる」

と、心で思つた。それで勢が出て、一生けんめいに、私は仕事を仕初めた。

### 【九】この二つのもの

金持と貧乏、この二つのもの程、厄介な対象は他にない。階級争闘の歴史もまた古い。それが道徳的に解決

されてゐた頃はまだよかつた。この頃のやうに、人間が人間にめざめ、人間より幅の利く金の存在を不合理だと、人々が氣がついて來たからには、最早や古い道徳で解決することは出來なくなつてしまつた。將來、この二つのものが、どの道を通つて、どこで握手するか、考へるまでもなく、人間が人間の本質に蘇へるところまで、ゆくゆくは行切つて終ふことは言ふ迄もない。そのことは別な話として、貧富貴賤を超越した生活機關である教育生活に於て、われわれ教師の胸にそのことが、強い力で響いて來る。この二つのもの、この二つのもの、教師なるが故に、私はそこに悩む。

「金持だからといつて、威張つたり贅澤したりしてはいけません。貧乏だからといつて、卑怯な心を起したり、人を恨んだりしてはいけません。」かういつた教へが、實際に於て、どれだけ効力のあることか。また、人生にどれだけの意義を與へるか。それを考へたらわかる。あきらめ上手な處世法を心得させて、それで人生の意義を深めてゐるのだなど思つて貰つたのでは、餘りになさけない。

一體、子供といふものは、社會生活に直接な關係がないだけ、金持貧乏といふ

この二つのものゝ對象については、可なり無關心であるやうである。子供達はさういふものを超越して暮すことが出来るだけ、さういふことをそれ程苦にしないやうである。こゝに少年の尊さがある。やがて大人になり、われわれの後を繼いでくれるこの少年の、この尊い心に、われわれ大人は眞劍になつて望みをかけたと思ふ。人類の後繼者であればこそ、彼等はこの尊さを持つて、生れ出て來てゐるのである。私はこゝに「勉強室」と「帽子の生地」といふ二つの綴方を並べて出したのは、全くその邊の子供の心を考へてみたいからである。

### 【一〇】希望と美望の二現象

この作者は、二人とも相當な家の子供であつて人と比べて淋しいことを感じなければならぬやうな家の子供達ではない。而も二人とも、家では非常に可愛いがられてゐる子供達である。だから、勉強室を造つてやらないのも、帽子の生地にわざ／＼古いものを使はせるのも、そこには母としての何かの考へがあつたからに違ひない。たとへそれが教育的な立場からではないにしても、事情をよく知つてゐる私にはそれが解る氣がする。ところが、「勉強室」の作者の心が、變にこだはつたものに

なつて出て来てゐる。

「いゝや。せやけど、『あや子さん』と言ふやろが。そしたら『なに』といつて出て来て、『二階へいこ』というて、連れて行かれてみ、どんなにくやしいか」とか、

「そねん言ふけど」と言つて、私はつまつた。腹がたつて、目になみだがたまつて来た。

とか、

「どこへいこ」

「雨ふつてるさかいにな」

「ふん、今二階で、からめるやいてるさかいに、いこ」

「ひやあ、またか」

と思つた。私はしかたなしに、かいだんを上つた。

とか、それから二階に上つてから、机の上の人形や花瓶が目につき、羅沙の机掛をちつと眺めてゐた。といふのだから、餘り晴々しない。勉強室を持つてゐる子

供が、別にそのことを威張り散らしてゐるわけでもないし、而も二人は大變仲のよいお友達なのだし、そのへんのところ、もつと無邪氣にやれさうなものだと思ふ。口惜しいは口惜しいにしても、「帽子の生地」の作者のやうな、少年らしい意氣が、どこかにありさうなものだと思ふ。ところが、この作品には、その無邪氣さも、その意氣込みも出て来てゐない。只、友達の持つてゐる、よいものが羨ましくて、その持つてない自分の身が口惜しくて、友達の持つてゐるものに好意が持つてなくなるといふのでは、その心境は餘りにありふれてゐる。弱い心の人は、殊に女は、自分と自分で、この弱い心にからみついで、絶えず口惜しがつたり、羨しがつたりしてゐる。そのありふれた心と、全く同じものである。時代の少年が、かういふありふれた心に、ありふれたからみつき方をして、口惜しがつたり涙をこぼしたりしてゐてよいものだらうか。淋しいことだと思ふ。少くとも「帽子の生地」の作者の意氣を、少年なればこそ持たせたい。この意氣こそ、若き者の誇ではないか、「帽子の生地」の作者の前では、富者も敵はない。色の褪せた古い生地の前で、色のよい新しい生地が、誇らうとしたところが、その意氣込みに

恐れて誇られはしない。

腹が立つたが、私は、

「何や、人のいふことぐらゐで、負けてゐるか。きつときれいに仕上げ、かぶつて見せる」

と、心で思つた。それで勢が出て、一生けんめいに、私は仕事を仕初めた。といふ、その意気込み方が、何と痛快によく利いてゐるではないか。物質を超越した、強い力である。この力こそ、人の生活に進出を與へる。「きつと、きれいに仕上げ、かぶつてみせる」といつてゐる言葉、希望に満ちた少年の心が、活々と動いてゐる。同じ境遇に置かれた、二つの相似た事件ではあるが、一つは美望の形にからまつて現れ、一つは希望の形をとつて、勇敢に現れたのである。一體その原因は、どこにあるのだらうか。私達はそこに目をやりたい。

### 【二】境遇の責任

さういふことは、無論子供自身の個性によることも大きいしかし個性は、決定的なものではなくて、傾向であることを認める以上、境遇の責任がそれ以上に大きいものであることを考へたい。何は

ともあれ、物質的にからまりついた心で、子供の前に出ることには、大人の不心得だと思ふ。大人の心の中に、階級的な觀念がちやんと住込んでゐたり、人間と物質を何時も對等に考へてゐなくては氣の濟まないやうな心でゐたりするのは、子供に接する資格がないと思ふ。「勉強室」に出てくる母とか姉とかいふ人の、あの場合の心持は、私にはよく解つてゐる。「私」が友人の勉強室のことをいふ度、

「そりや金持やもん」

と、一も二もなく、二三度も言つてゐる母の言葉、また姉が學用品代がどうか後援會費がどうかいつてゐることにしても、それは本氣で言つてゐるのではなくて、子供をなぶりものにしてゐるのだといふことが、私には解る。また教師のことが話題になる場合の様子から見ても、この「姉」といふ人もかつては自分も通つて來た學校のことで、その事情はよく知つてゐる筈なのだから、この綴方に出てくるやうな、白つぱくれたことを本氣で言ふ筈はない。子供とその教師である私とは、已に六年間も一緒に來た親しい仲であるので、この子供に限らず、みんな家庭で私の話をよく出すやうである。殊に自分の立場が危くなつたりするやう

な場合には、甘く先生を味方に引張り出すやうでもある。その親しさは、無論親達にも解つてゐる。親と教師とも長い間の交際で、お互に解り合ふところまでは解り合つてゐる。だから、子供が教師をかつぎ出すと、親は冗談半分にそれをなぶる。子供はやつきになる。それが面白くて尙からかふ。さういつたことも始終綴方に出てくることだし、その子供なども、さういふ一人だし、この「勉強室」の場合の心持は、私には、よく解つてゐる。それからまた、この子供とあや子さんといふ友人との仲は實によく、家は隣合せではあるし、学校にゐても何時も二人は喰つついてゐるほどである。それ等の感情を、よく知つてゐるから、私はこの綴方を苦笑しながら、読むことは讀んだ。しかし、なぶるにしても、よいなぶり方ではないと、「作者」に同情した。

「そりや、あすこは金持やもん」

何の氣なしに出た言葉ではあらうが、さう聞かされた子供は、どれだけ物淋しい心を起すかも知れない。そこへ持つていつて、學用品がどうの、後援會費がどうのと、勘定高い話が出て來たりすると、大人は平氣でも子供の心には、しみじ

み應へることだらうと思ふ。涙をこぼした後で、

「もうあきらめた。よいしょ」

と、子供が言つてゐる。その心ははつきり解る氣がする。なぶつたことが、結局子供の羨望心に油をかけたことになつてゐる。金持の友人の眞似はさせないのはそれでよい。しかし、友人のその誇を追つかけ、追ひ抜くだけの誇を何かの形で持たせたい。なぶるにしても、もつと聖い美しいなぶり方がほしいと思ふ。私なども、親しさのあまり、子供を變な工合になぶつて終つて、後で氣がついて、冷汗することが、よくあつたりする。恐しいことだとよくよく知りぬいてゐながら斯ういつた綴方を見せられると、今更に冷汗が出る。



第十一講 言葉について

【二】文例 江戸つ子

(五年女兒)

「姉ちやんねよか、え、ねやへんか」

一心に雑誌を讀んでいらつしやつた姉さんは、ばたんと本をふせて、

「ねよか。もう十時ごろやるな。お母ちやんおそいな。ねよか」といつた。

「うんねよ」

「よつしや」

姉さんは、立ち上りなさつた。二人は部屋へはいつた。もうちやんと、寢床はしいてあつた。すぐ、私はころんだ。からだは急に、大きくこそばゆく、よい氣持になつた。手を上へあげて、からだを思ひきりのばした。姉さんも、ころこびなさつた。しばらくして、私が知つていびきをすると、姉さんが、

「もうねたの」

と、江戸つ子をつかつておづしやつた。面白くなつて、私は目をあけた。

「私とこの級に、江戸つ子の人四五人おやはんねで、ええ言葉やで」

「お前もつこたらええが」

「つこたら、お前ら笑ふが」

「笑はへん。そやつたら、今からええ言葉の練習しようか」

「ふんしようか。面白いな」

私はおかしいやうな氣持がして、自然に笑ひたくなつてきた。

「笑ひなしやで。まじめでな」

「ふんふん、よつしや」

といつたが、やつぱり、自然に笑へてきた。

「お母さん大變おそいわね」

と、姉さんが、まじめさうにいつた。どういうたらよいかわからないし、けつたいなこと言うたら笑はれるし、どう言はうかと思ふと、面白くなつて、何もいへなかつた。

「早よ言ひさ。笑はへんから」



月もきれいなね」

と、やつとこれだけつとけていつたが、ふしを一つもかへないで、たゞ、ねをつけてゐるだけだつたので、はづかしかつた。蚊がぶらんぶらんと、目もとでないた。うるさいので、手ではらつた。姉さんが、

「蚊張つりませうか。やはり涼しくても蚊がくるわね」といつた。私は思ひついたので、

「ええつりませうか。涼しくなると、あばれ蚊でね」といつた。がもう目があかなかつた。急にねぶたくなつてきた。起き上つて、蚊張をつつて、二人ともはいつた。私はすぐ、ふとんをお腹の上までかぶつて、目をとぢた。江戸つ子、早よ言ふやうになりたいな。聞いたら氣持よいし、どうしたら、ふしつくやうになるやろと考へた。

「もうねるの」と姉さんが言つた。のといふのだけつけてゐるけれども、ふしは一つもかはつてゐない。

「うなんもう」

と、私は言つた。もううるさかつた。どうして、奈良へ生れてんやろ。きたない言葉やのに、東京へ生れてたら、生れた時から、もう江戸つ子つかふやうになれるのに、東京の人はとくや。早よあんな言葉つかふ人になりたい、と私は思つた。

### 【二】読む言葉と話す言葉

國語教育では、標準語と方言といふことが、よく問題になるやうである。この間も或る先生がたづねて来て、私にそのことに就いていろいろと聞かれた。關東では箸のことを橋といひ、關西とはアクセントがすつかり違ふが、學校で取扱つてゐる標準語は、どうすればよいのだらうかと、その人は言つてゐた。また、標準語のアクセントに就いては、文部省から何か詳しい注意が出てゐるのかとも問はれた。私は平生さういふことは、國語教育上それ程大した問題だとは思つてゐないし、問題にしたところが仕方のないことだと思つてゐるので、その通り答へたことだつた。

私は平生、標準語は読む言葉、地方語は話す言葉と心得てゐる。自分のつかひ

慣れない言葉は、知つてゐても談話にはなかくつかはれない。つかつても味と力が出ない。私はこの土地に大分長く住んでゐるが、奈良の言葉には、慣れれば慣れる程面白い味がある。輕快で滑稽味があつて、純粹の奈良言葉で話してゐるのを聞くと、どうも自然に笑へてくる。里見弴氏の小説に、よく大阪人が出て來るが、大阪人の對話は實に面白い。正しくない言葉かは知れないが、大阪人らしい人情が、その言葉によつて髣髴として浮んでくる。人を迎へる場合に、關東人は、

「いらつしやいませ」

といひ、關西人は、

「おいでやす」

と言ふ。簡単な言葉にも、男性味と女性味がちゃんと出る。人を送り出す場合にしても、關東人は、

「うつてらつしやいませ」

といひ、關西人は、

「早うお歸り」

といふ。言葉の上だけのことではなく、人情にもその言葉の持つ味通りの違ひがあると思ふ。關東人は關東の言葉を上手につかひこなし、關西人は關西の言葉を上手につかひこなす。言葉だけを聞いて、その人の持つ人情風俗がちゃんと想像出来る。言葉はまた、その土地の地勢氣候をも代表する。言葉といふものは、單に言葉だけといふ簡單なものではないからである。海國には海國らしい發音があり、山國には山國らしい發音がある。とにかくにも、關東語は關東で育つた言葉であり、關西語は關西で育つた言葉である。だから標準語は結局標準語で、一つの讀む言葉、書く言葉として、練習されるべきもので、それ以上のことは望んでも出来ないことだし、やつても仕方のないことだと思ふ。

今、この綴方「江戸つ子」を讀んだら、私の言つてゐる意味のことが、よく解つてもらへると思ふ。この子供は江戸言葉を、まるつきり知つてゐないのでない。綴方に出てきてゐる姉さんといふのも、女學校の卒業生である。二人とも、江戸言葉の學友一人二人には、絶えず接してゐるわけではあるし、教師の言葉に

も慣れてはゐるし、讀物などでも、絶えず間接に接してゐるのでもあるのだから。さうして、知るだけは知つてゐるのだから、綴方「江戸つ子」に出てくる通り、その言葉を讀合せすることだけは出来てゐる。しかし、それで談話することは出来てゐない。そこで、「私」はのとかねとかをつけて、江戸言葉らしい語呂に作つてみることは出来るが、ふしがつかないから、つまらないと、気がついてゐる。談話の言葉ならば、當然アクセントがつくのだけれども、それが見つからない。つまり、ふしが見つからない。二人は江戸言葉を讀合せてみたことにしかなつてゐない。そこで、

「もうねるの」

と姉さんが言つた。のといふのだけつけてゐるけれども、ふしは一つもかはつてゐない。

「うなんもう」

と、私は言つた。もううるさかつた。

と言つてゐる。而もその「うなんもう」が、この場合を、實によく生かしてゐる

から、仕方がないと思ふ。

私は、英語の教師の仕事は、實に無趣味だらうなど、時々思ふ。結局言葉は音楽である。その人の持つてゐる言葉は、どの言葉よりもよくその人の心を、代表する。地方色の持つ味と力の尊さが、そこにある。

### 【三】学校の言葉

ところが、私の學校などでは、子供達も教師もお互に言葉がまちまちである。勿論大部分は奈良言葉だが、東京言葉の子供もゐれば、鹿兒島訛りの子供もゐる。岡山邊の言葉を持つてゐる子供もゐれば、京都言葉の子供もゐる。第一教師である私が、今では奈良言葉にも慣れたが、初めて子供達と逢つた時には、少々工合がわるかつた。そんなわけで、私は相談の上、皆に通じる言葉、つまり標準語をつかふことにした。その頃、東京言葉の子供が二十人の中に四五人もゐたので、割合樂だつたが、大多數の子供は、標準語を關西訛りでつかつたわけである。そんな風にして、二年三年と慣れるにつれて、そこに學級の言葉が出来上つてしまつた。この中へは、授業の速記録を入れる餘裕がないが、次巻はさういつた形のものを経めようと思つてゐるから、それ

についてみて頂きたい。已に発表した授業速記録が二三あるので、御承知になつてゐて下さる方があるかも知れない。とにかく、あゝいつた言葉である。あの言葉で、子供達は樂に話すやうになつたのだつた。あれだけ樂に使へるやうになつても、しかし標準語は換算語である。どうも儀式張つてゐて、氣持がくだけて來ない。意見の交換などの場合には、あの言葉で立派に用が済んで行くが、結局用を済ませること以上のものにはならぬ。そこで氣持が進んでくると、自然に持前の言葉が出てくる。それが出だすと、場面が甚く活きて來て、心同志が活躍を始める。それでいゝので、それをどうとも出來ない理由はそこにあるし、しようと骨折つたりする者こそ馬鹿だと思ふ。

#### 【四】表現と言葉

由來、子供の言葉は、境遇次第で、直ぐ變るものである。昨日まで奈良言葉を上手につかつてゐた子供が、一年も東京に住んでくると立派な東京言葉になつてくる。女學生の年頃になると、早く慣れようと意識的に努力するから、これも割合早い。二十歳すぎると、なかなかさうは行かないやうであるが。相當な年になつてからは、後、一生東京に住んでも、身

に込み込んだ地方訛りは、遂にとれないであらう。言葉と境遇の關係ほど、密接なものはないと思ふ。そこで、學校に學校の言葉、學級の言葉が出來れば、意見交換の用にだけ間に合ふ一通りの標準語は、割合樂に仕上るやうに思ふ。それだけは仕上げたいと思ふ。でないと思ふと表現力が伸びにくい。つまり話す言葉の外に、讀む言葉、書く言葉に慣れさせることである。それに慣れてくると、思想をまとめ、それを發表するのに、非常に樂になつてくる綴方が自分一人の手帳記録でない以上、他府縣の子供に見せては、最早や通じないやうなのでは、表現としての普遍性に缺けることになる。對話は當然、出てくるその人の持つてゐる言葉であるべきであると同じく、地の言葉は當然標準語であるべきである、つまり讀む言葉と話す言葉の兩刀を握つてゐなければならぬ。綴方の場合だけでなく、藝術の仕事の、普通の心得だと思ふ。

第十二講 その年頃の子供(一)



【一】綴方「江戸つ子」に就て

今述べた「江戸つ子」は、前項のやうな立場から見ても面白い材料だが、また、この年頃の子供の氣持を語る面白い材料でもある。前に私は、少年青年の生命は、不義不正に對する怒であると言つた。少年青年は、どこにあつても正義派ときまつたもので、この年頃に、この心を持たないやうな者は、一生恐らく何事をもなし得ないであらうと言つた。その通り、この年頃の者の心は純潔へ純潔へと向つて、動いてゐるのである。濁つたものには、味方出來ないといふのである。美しいもの、聖いものにあごかれ、醜なもの、不淨なものを憎む。青年時代のことを、星堇時代だなどと言つた人がある。この時代の者の弱點を甘く言つた言葉だと思ふ。星や堇にあごかれをもつ浪漫時代といつて終へない強さが、空に遠大の眞理を叫びかけ、花に地上の聖道を話しかける、この若い心にだけ育つのである。星や花の美しさを忘れた心は、どれだけ合理的に出來てゐても、人間を支配する力とはならぬ。とにかくにもこの年頃の子供は、着物のことにでも、言葉のことにでも、父母兄弟のことにでも、單なる持物のことにでも、凡てにこの星堇的な氣持を非常に強

く働かす。熱愛的なその心境をあごかれといはうか。綴方「江戸つ子」は、その邊の心境を實によく語つてゐる。すつと初めに出した「お母さんの帯」などいふのも、かういつた意味の材料だつた。その他にも適當な例はあつたかとも思ふが次に別なのを一つ出してみる。

【二】文例 白い靴

(五年女兒)

關さんは白靴を買つてもらつて、大變うれしさうに道を歩いてゐなかつた。それを見ると、私はたまらなくほしくなつた。關さんが靴をぬいでゐると、はいてみたりしてゐた。それをはく度に、買つてほしいと思つた。ある日、私はお母さんにねだつた。お母さんは、「いらない」と言つて、買つて下さらなかつた。私は悲しかつた。

「お母さん、私自靴かつてほしいわ。關さんも持つて居られるのに」

「そんな物、ぜいたくでせう。あんたはズツクでよろしいが」

とお母さんはおつしやつた。私がいくらねだつても、お母さんはきいて下さら

なかつた。すると、横でおぬい物をして居られた姉さんが、

「さだちゃん、白靴はきつといるもんだから、お母さんに買つておもらひ」

とおつしやつた。いつも姉さんの言葉を聞くと、とくしんなさるお母さんは、

「そんなら買つてあげよ」

とおつしやつた。その夜暑いのに、姉さんにいつてもらひ、喜びいさんで靴屋へ出かけた。そして、きつちり自分の足にはまる、よいのを買つてもらつて、大事にふるしき包みにつゝんで家にかへつた。家に歸ると、靴に白い粉をぬつてみがついた。あくる日、さつそく京都の子供博覧會へはいていつた。汽車の中で、土がついてゐないかしらんと、思つて、見てみたり、足をふまれないかとよく注意をしてゐた。汽車からおりて、その驛のブラツトホームを歩く時、かゝとを高くして、西洋人の様に氣どつて歩いた。京都の町を歩いた時、店のちんれつがあると、そこで足もとをがらすにうつして見た。帽子の羽根は、風で美しく動いてゐる氣がした。電車通りには、水がまいてあるので、靴が土によごれてきた。家へ歸ると、きれいにみがついて、下駄箱になほした。

それから四五日たつて、生駒の涼みに連れてつてもらふことになつた。私は靴を出して、一しようにんめいに、白い粉をつけた。生駒へ登るみちみちも、土がつくと、紙でふきふき歩いた。

### 【三】この時期とこの要領

子供の心が、だんだんかう向いて來ると、教育の仕事は非常に面白くなつて來る。前にも一寸述べたと思ふが、私はこの子供達の一年生の時に、総合教育、つまり奈良の學校で言つてゐる合科學習の仕事と思ひ立つて、前人未踏の道に踏込んでみた。幼學年の仕事は、無論各科綜合の形でなければ、自然的に運ぶものではない。それが三年生の終りから四年生頃へかけて、仕事が急に複雑になつた故か、さういふ意味の仕事は少々やりにくかつた。ところが四年の終りから五年へかけ、子供の心がだんだん少年らしい氣分に向いて來たにつれて、各科綜合の仕事がだんだん深刻になつてゆき出した。同じ形の仕事ではあるのだが、幼學年時代のものとは、その味が非常に變つて來た。幼年の仕事は幼年だけに即興的であるが、少年期へはいると、それが目に見えて、心興的に移るからである。総合的な仕事に、本當に實

の入り出すのは、この時期からである。またこの仕事に導いてみて間違ひのないのも、この時期である。それでは、この時期へどんな風に持込めばよいのか次に一つの綴方を出してみる。

【四】文例 キューピーの服 (五年女児)

学校のかへり、藤岡さんにもいつてもらつて、荒奈良へ、キューピーを買ひに  
いつた。

「ごうめん」

とふと、

「は」

といつて、庭をはいてわた人が、ほうきを持ったまゝ、私のそばへ来た。

「何しませう」

「ちよつと、キューピーちやうだい」

「は」

その人は、そこにならべてあつたキューピーを、一つ渡してくれた。

「これいくら」

「四十銭」

「もう少し大きいありませんか」

「これ九十五銭」

といつて、別なのを渡してくれた。

「あんまり大きすぎるな、藤岡さん」

と、私はいつた。

「さうやな」

と、横にゐた藤岡さんが、いつた。

「そしたら、小さい方もるとききます」

「さうですか」

といつて、先のキューピーを、私にわたしてくれた。

「これちよつと」

といつて、私は財布から、五十銭銀貨を出して渡した。その人は、それを受け取つてきたないきんちやくをあけ、お金をちやりんくいはせながら、十銭貨を渡してくれた。

「おほきに」

荒奈良の家を出た。

「おまちどうさん」

と、藤岡さんに言つて、キュービーを、手さげに入れた。手さげの口から出てゐるキュービーの頭を、道々見た。京終の驛についた。私は、見たくなつて、便所へ行くふりをして、便所のそばへいつて、キュービーを手さげから出してぢつと見てゐた。目のまるいのと、頭のかつかうがかはゆくて、いくらでも見たい氣がした。又手さげに入れて、藤岡さんの所へいつた。改札口を出て、汽車のくるのを待つてゐた。汽車は音を立て、私達の前に止つた。藤岡さんは友達があるので、向ふのはこの方へいきなかつた私は自分の前のはこの中をのぞいた。四年生のみよちやんがゐなかつた。早速そこへのつた。汽車が出た。

私は、手さげからキュービーを出して、みよちやんに見せた。

「今買うてきましてんで」

「さう。かはいらしいな」

みよちやんは、キュービーを持つて、ほつべたにすりつけなかつた。

「私もほしいわ。目すきや」

といつて、みよちやんは、目をなでてゐなかつた。横にゐたいなか者らしい人が笑つゐた。私とその人の顔を、じろつとみると、

「かはいらしいの、そう」

と、言ひなかつた。汽車は、帯解についた。次、櫛本とついで私はおりた。美代ちやんとつれて、改札口を出て、二人は歩きだした。後から、

「辻川さん」

とよんだ。ふりかへると、補習の松本さんが、靴の音をさせながら來なかつた私は又、手さげからキュービーを出して、松本さんに見せた。

「今日買ひましてんで」

「さう、ええわ。私かてほしいわ」

といひなさつた。松本さんも、キュービーを持つて、ちつと見てゐなさつた。

「私目すきや」

「私かて」

と美代ちやんがいつた。三人は、キュービーを見ながら歩いてゐた。

「さよなら」

松本さんは不意にかういつて、キュービーを私に渡しなさつた。見ると、まがり角まで来てゐた。

「さよなら」

「さよなら」

三人は、別れた。松本さんは南の方へいきなさつた。二人は家へと急へだ。

「キュービーの服つくつたら見せてあげるわ」

と、私が言つた。美代ちやんは、もう一度キュービーを見た。私の家の前まで来た。別れて私は家にはいつた。

「たゞ今」

「おかへり」

といふ女中の聲が聞えた。オーバをぬいで、手さげを下し、中からキュービーを出して、二階に上つた。さつそく戸棚のひき出しから、紫色の毛糸と、白と桃色のと出して、あみ針と一しよに持つて、机の前にすはつた。帽子と服と、どつち先にあまうかと考へた。初めに、帽子をあむことにして、桃色の毛糸であみ出した。一段あんではキュービーの頭へのせてみ、またあんではのせてみした。だんだんあんで五段まで来た。キュービーの頭にのせると、毛のたれ下つてゐる所まであつた。

「もう。三段あんだら、えゝ」

と、つぶやきながら、又あみつゞけた。やう／＼三段はあめた。桃色のを切つて、白のとつなぎ合せて、一段あんだ。毛糸をきつてとめた。こんどは帽子に通すひもをあんだ。キュービーにかぶせると、まんまるい頭に、よくに合つた。まるい目が、よけいかはいらしくなつた。手をひろげて、私の方を見て笑つて

ゐるやうに見えた。ぢつと見とれてゐた。

「そや、これから服あまんならん」

横にあつた、紫の毛糸をもつて、長あみを一段あんだ。何段あんだらよいだらうかと思つて、くらべて見た。長あみ一段の廣さにくらべて、からだの長さが六倍ほどあつた。だん／＼あんで、腹のところで大分目をふやして、うまくキュービ！のからだに合ふやうに工夫した。五段まであんで、もう一段といふ時、手がかいだるくなつて來た。一寸手を休めて後の一段をあんだ。それから、すそへひだをつけることにした。白の毛糸で、ささあみを、波のやうに、一段あんだ。それから戸棚から、桃色のリボンをさがし出して、胸まはりに通して結んだ、リボンをゆるめて、それをキュービに着せた。リボンでしめると、すそが短くなつて、おしりの所までしかこなかつた。服をぬがせて、紫色で下へもう一段あみ足した。着せるとかはいらしかつた。机の上に立たせて見てゐた。八の字のやうになつたまゆ毛がよかつた。電燈がついた。下へおりてお母さんの所へいつて、

「お母ちゃん、いかんか」

と、キュービを出した。

「えゝわ、中々上品や」

といつて、お母さんは、見てゐなかつた。

「さあ、つぶれたらいかんから、しまつておきなはれ」

と言ひなかつた。私は、二階に上つて、本箱の上ののせた。晩に机の前にはつたが、キュービを見てゐると、うれしくて、うまく勉強が出來なかつた。

あくる日は、水曜だつた。キュービを持つて學校へ行つた。授業の始まる前

「やあ、かはいらしいの。だれのやの」

といつて、持ち上げなかつた。

「私のだんで」

といつて、私はそばへ行つた。中西さん、深井さん、立野さん等が、

「かはいらしい」

といつて、集つて來なされた。

うれしくて、ひまさへあれば、机のふたを少しあけて、キュービーを見た。その日は終つた。私はキュービーをかゝへて、家へ歸つた。

あくる日。裁縫があつたので、よろこんで、キュービーを持つて、學校へ行つた。おべんとうをすませて、外へ出ようとすると、鳥羽さんの机に、荒奈良の八十五錢のキュービーがのせてあつた。鳥羽さんのかはいらしいが、私の方がよかつた。鳥羽さんの前で見てゐた。すると先生が、私の方を見て、

「それ見せて頂戴」

と、キュービーを指さしなされた。私は、自分のと鳥羽さんのと二つ持つて、ストーブのそばの先生の所へいつた。先生は、二つを見くらべて、にこ／＼しなされた。教室に残つてゐた人が十人程、ストーブのまはりに集つて來た。先生は、皆の顔を見て、

「これ一つほしいな」

と言ひなされた。私は笑つてだまつてゐた。先生は二人にかへしなされた。私

はキュービーを机の中にしまつて、外へ出た。裁縫の時間になつた。キュービーを持つて、裁縫室へはしつていつた。皆は集つて來た。そこへ中澤先生が入つてきなされた。お禮がすむと、先生はにこ／＼しながら、

「辻川さん、キュービーの服つくつたのね。鳥羽さんも。それではこの一時間を取つて、キュービーのことで何か話してもらひませう。何でもよろしいから」と言ひなされた。私は、

「はいはいはい」

と言つて、手を上げた。先生が私をさしなされた。私は立つて、

「キュービーと、あたりまへの人形とちがつてゐるところは、第一頭のまはりがお腹のまはりよりも大きいこと。それから第二は、お腹の大きいこと、おしりの大きいこと。全體がふとくて短いこと」

と言つて腰かけた。先生の机の上には、本田さんの八十五錢のキュービーがつて居た。スカートがえび茶で、上衣がたけ色で、何だかいやしあつた。私は、自分のキュービーを、先生の机の上に持つていつておいた。廣瀬さんが、

「あのね、本田さんのキュービー、その色の配合がいかに思ふの。たけ色のしつこいのと、えび茶のしつこいのとでせう。もつと工夫したらよいと思ふの」

と言ひなさつた。

「それから、キュービーの頭の先はとがつてゐるでせう。それで本田さんのやうなごつい帽子をあんだら、に合はないと思ひます。私の方は一寸ましでせう」と、私が言った。

「さうですね。色の配合、一寸いやらしいですね。このえび茶を何かの色にかへて、エプロンをかけてやると、かはいくなるでせうね。こちらの方はどうでせう」

といつて、先生は私のを上へさし上げなさつた。關さんが、

「それは、紫と一寸白はいつてゐるし、第一帽子がよいと思ひます」と言ひなさつた。

「さうですね。これもエプロンかけさせたら、よくなるでせうね」

と言ひなさつた。皆は、私のをよいやうに言つたので、大變うれしかつた。

### 【五】色と形と音

学校には、裁縫、圖畫、手工、唱歌、體操などと別れてはゐるが、結局は、より美しい色、より美しい線の流れ、よりよ

い音律の響きを追ふ心以外に、望んでかなふものは何もないのである。何々の縫ひ方、何々の歌ひ方、何々の造り方などいふものは、つまり手習草紙である。それ等のもは、何れは記憶の中から取り去られてゆくものである。さうして、最後まで残るものは、鍛はれた心だけである。教へられた何々の造り方、何々の歌ひ方は忘れても、鍛はれた心が、より高きもの、より美しいものへと絶えず進出する。さうしては境遇を切開き、新しい生活を生んでゆく。色と形と音、これが文章の道に、姉妹の關係を結んだ、いふところの姉妹藝術である。それ等の姉妹に護られて、順々と人の道を歩んで行くもの、それが即ち美、聖を求むる愛の心である。

昨日も新聞を見てゐると、中學令の改制といふのが出てゐた。なる程今度のは餘程思切つたものになつてゐる。しかし、法制經濟を除いて、國文學、美術を加



へるといふのだから、苦笑が出た。共産黨事件と並んで、大きな活字で出てゐたから、尙可笑しかつた。一時は、法制經濟でなければといつて加へた學科ではないのだらうか。ここ四年もたつと、どうも生優しい文學青年が殖えて困ると、文部省は首をひねり出すのではあるまいか。確にさうなりさうな氣がする。最後の一年間や二年間に、文學史の一通りや、繪の展覽會でわいわい騒がせるやうな仕事なら、却つて文部省の心配が殖えるだけではないかと思ふ。いらぬいおせつかいだが、その心だけを述べておく。

### 【六】勉強と仕事

綴方「キュービーの服」の作者が、キュービーを手に入れる。福々しい笑の化身であるキュービーを我物にしたうれしさから、驛の便所の所にかくれて一人で眺めて楽しむ。それだけでは、心の喜びはなかなか盛切れないので、途中で出逢ふ友達の誰彼なしに見せる。それでも盛り切れない。帽子と服をあむ。母親に見せる。本箱の上に祭る。翌日學校に持つていつて、友達に見せる。その翌る日も持つて行く。先生に見せる。裁縫の時間を持つていつて、正々堂々學友達の前に出して、意見を述べたり、批評を聞いたりす

る。それでも尙満足出來ないで、今度はその顛末を、長い綴方にして、自分の力に盛れるだけのものを盛上げてみる。四十五錢のキュービー一つが、よくもこれだけ子供を喜ばせたと感心する。盛れども盛れども盛りつくされぬこの熱と、この喜びこそ、子供の生命でなくて何であらう。子供がかう言つた心境に這入つて來た時こそ、教師の手の延ばしどころだと思ふ。私とこの裁縫の教師との間はなかなか甘く心が通うてゐたから、かういふ仕事は非常に面白く出來た。中には意見の違いから甘くゆかない教科も出てくるが、その點國語の教師は、繪が描けないまでも、繪を見て批評の出來る目を持ちたいと思ふ。音楽が出來ないまでも、うただけは育てゝゐたいと思ふ。さうして適當に時間の配りをつけ、どんどんさういつた仕事に切込んで行きたいと思ふ。私は前に、教室は明るい子供部屋だと言つた。また教室は家庭だともいつた。この時間をかうしたのは、讀本が遅れるとか、修身が遅れるとか、目の先のことばかりに捉はれて行くのではなく、もつと根本の所に目を届けたいと思ふ。修身の教科書などみると、實につまらぬ材料が澤山出てゐると思ふ。あんなものを片つ端からききききやつたりしなく

とも、忠君愛國の心を健實に育て、行けると思ふ。やつて仕方のない材料はどんな／＼除き、やつてやり甲斐のある仕事に、深く切込んでゆくだけの熱を欲しいと思ふ。材料の取捨選擇の自由は許されてゐるのだし、心の合つた人々が、正しい道順を踏んで、ぼつぼつに開拓して行く氣ならば、小學校の仕事ほど面白い仕事は他にないのではないかと思ふ。われわれは、その勇氣と力を持ちたいと思ふ。

この頃、教科の総合といふことを、單なる教科の聯絡だと心得、一つの材料を繪に描かせ、文に綴らせ、算術問題につくらせなどして、威張つてゐる人が實に多いやうである。それでは、勉強にはなるかも知れないが、仕事にはならぬ。仕事といふものは、盛つても盛つても盛り切れない熱と力から湧いて出るものである。勉強だけのことなら、知識はついても、力が鍛はれはしない。つまらないが、らくた騒ぎに過ぎない。

合科教育を主張してゐる或る大家の仕事を見た。學藝會の日だつたが、「汽車の旅」といふので、四五人の子供が出て来て、

「そのことを綴方につくりました」

「それから旅費と哩數を材料にして、算術問題をつくりました」

「途中の景色を思ひ出して繪にかいてみました」

「道々の地理の話を書きます」

まあかういふ工合になつて行くのだつた。而も綴方にも繪にも算術問題にも、地理の話にも、「よし」といひたいものが、何にも包まれてゐなかつた。それから書きた、讀本の材料にある「燈臺守の娘」といふのが出て來た。讀本をよんで、その場面を想像で出させて、うたでもうたはすのかなと思つて見てゐると、てつきりその通りの順序をふんで見せた。それで先生は、部の厚い著述を數冊も持つてゐるのだから、世の中もなかなか甘く出來てゐると、感心した。

第十三講

その年頃の子供(二)

【一】文例 夜中

(六年女兒)

「あああ」

と、私はためいきをついた。うすぐらく電燈が光つてゐた。

「なんでこんなに眠られへんのやろ」

と、一人言を言つて目を閉じたが、何かこはい者がゐる様で、たまらなかつたお父さんがるすだので、「ゴーゴー」といふいびきも聞えずに、一さう氣味が福かつた。また目をあけて千字文のびやうぶを、ちつと見つめて居た。びやうぶの上から、ゆうれいがのぞいてゐる様に思へてくるので、又、皆のねてゐる方を見た。赤い皮の置時計が、コトコトカチカチと、細い音をたてゝゐた。何やら泣きたくなつて來た。

「早よ朝になれ、朝になれ」

と、一人ごとを言ひながら、カーテンの間から、ガラス戸越しに外を見た。博物館の電氣がぼうつとかすんで見えるだけで、まだ眞黒だつた。となりに寝て

ゐる富美ちゃんは、眞赤な顔をしてよく眠つてゐるし、弟も叔父さんも、すやすやと眠つてゐた。

「あゝあ。たい屈やなあ」

大きなあくびをした。母さんだけでもゐなさつたらよいのにと思つた。

「そやそや。富美ちゃん起きてやれ。そしたらこはい事ないやろ。そや、そや」と、また一人でいつた。けれども、一人でこはいなので、起したと思はれたら、はづかしいと思つて、自然に起る様にしようと考えた。ねごとだつたら、どんな大きい聲出しても、はづかしくない。ねごとのまねをしてやらうと考へつた。もうこはくなくなつて、笑へて來た。私はしらん顔をして、目をつぶり、ねごとの様なへんな聲を出して、

「やあやあ、富美ちゃん」

と、言つた。富美ちゃんは、赤いおふとんをひつかぶつて、すつこんだ。ポーポーと、汽笛の音がした。少し心細くなつたが、もう一度大きな聲で、  
「やあやあ、富美ちゃん」

といった。富美ちゃんは、ふとんの中にすつこんでしまつて、どこにゐるのかわからなかつた。氣持が悪くなつて、おふとんをまくつた。富美ちゃんは、かみの毛をばらばらにして、前よりも赤い顔で、畳の上になてゐた。もとの通りにねかしてあげようとすると、自分でねどこの中へはいつた。

「ようあばれる子」

私は小聲で言つた。すると富美ちゃんは、急に立上つて、目をこすりながら、よろよろと歩いて、

「かずやん。早よ起きてくれんよつて、おくれる。先行かはつたわ」

といった。そして、又よろよろ歩いた。私はびつくりして、富美ちゃんのする事を見てゐた。

「またねとぼけはつてんさう。よう起きてたことや」

と、舌を出して、

「ふつふつ」

と笑つた。富美ちゃんはね床の上をよろよろ歩いて、おふとんの中にもぐり込

んで、平氣な顔でねむつてしまつた。しばらく私は、ぼかんとしてゐたが、又、「ふふふふ」

と笑へてきた。

電氣かけが青いので、まくらもとが青く光つてゐた。しばらくの間は静かだつた。ポーポーと、又音がしたかと思ふと、シュツシュツゴトゴトと汽車の音が聞えた。晩讀んだキングの「鐵路の殺人」のことを思ひ出した。急にまたこはくなつてきた。汽車は便利でも、ない方がましな様に思つた。キングの本がまくらもとにあるのが氣持悪い氣がして、さうつと持つて、次の部屋へ入れた。其の時、天井でがたがたと音がした。どきつとして胸をおさへた。「ねずみだ」と思ひかへして天井を見た。又しづかになつた。天井板のつきめをかぞへて、「一枚二枚」

と讀みはじめた。前、少女の友に、おふとんをひつつけてねてゐると、天井から女の首が出たといふ事がかいてあつた。私は富美ちゃんと、おふとんをひつつけてゐたので、今にも首が出さうに思つて、おそろしくなつてきた。思はず

ガラス障子の方へ、目をむけた。ガラスにうつつた顔が、自分の顔だとわかりながら、化け者の顔が、にやにや笑つてゐるやうに思へた。何から何まで、なんだか悪い者がゐるやうに思へて来た。

「早よ夜あけよ、夜あけよ」

と外を見た。前と同じやうに博物館の燈が光つてゐるだけで、松の木が黒く見え、まだまだ朝らしくなかつた。起きて時計を見ると、三時すぎだつた。

「ああああ、まだまだや」

といつた。うしみつどきのことを思ひ出した。

「そや、今頃でもあつてんわ。正ちゃんの友だちが、中學校にもなつて、追ひかけられはつてん。そやそや」

頭にろうそくを三本たてた、女の人のすがたが目にくるやうな気がした。

「かなはんなあ」

と思ひながら、花びんにいけた花を見てゐた。いつの間にかうとうとして来たので、目を閉じた。

「敏子ちゃん、もう起きや。六時やで」

といつて、富美ちゃんが起きてくれた。となりのつるべの音がして、にはとりの鳴き聲が聞えた。カーテンをひくと、急に明るくなつた。富美ちゃんのゆふべのことを思ひ出して、

「ふつふつ」

と笑つた。富美ちゃんは、平氣な顔をして、上着を着てゐた。ねまきをぬぎぬぎ、ゆふべ何故こはかつたのだらう。今やつたら何でもないのにと思ふと、あほらしく思へた。となりの部屋からキングを持って来て、昨日のところを見たが、こはい事はなにもなかつた。

### 【二】好奇心

子供はみんな物好きだ。求めてこはいものを見たがつたり、こはい話を聞きたがつたりする。私が子供の時のことだつた。或夜友達二三人と先生の家へ遊びに行つた。何か話をしてほしいと先生にねだつた。どんな話をして上げようかと先生は言はれた。私達はこはい話をしてほしいと言つた。どんな筋の話であつたか忘れたが、山奥の岩穴に住んでゐた山姥が、人間を

ひきさいてその肉を喰ふ話だった。話上手な先生だったが、私達の注文通り、立派に私達をこはがらせた。帰り田圃道を六七町も通らなければならなかったのだが、山が、私達はそこを抱合つて走つた。後で思出すと流星に違ひなかつたのだが、山の松の木の間から、長く尾をひいた火の玉が飛んだのが、一人の子供の目についてた。皆は蒼くなつて、道の辻に立止つてその火の玉を見てふるへたことがあつた。その時のことが今も記憶の中に残つてゐる。さうして怖い話を聞き、怖いものを見るのも、その年頃の楽しみの一つなのである。怪談ものや、それに類したものを子供達はよろこんで讀むやうである。

### 【三】讀物のこと

怪談ものに限らず、この年頃になると子供はいろいろな雑誌類をよみちらすやうになる。讀書力が急に進んで来るからではあるが、教科書やそれに類したやうな味のない讀物では満足出来ない年頃になつてくるのだから、止むを得ないことである。ところが、さういふ讀物は非常に低級で、安心して子供に與へられさうなものが、極めて少い。しかし、私はそのことを餘り氣にかけないことにしてゐる。氣にかけたところが、家庭の趣味をど

うするわけには行かないのだし、子供の方で氣の進んでゐるものを、禁止するのとほど、教育の野暮はないことも知れてゐるのだから。そこで私は、大抵月に一回づゝ「漫談會」といつた形の催しをすることにしてゐた。自分の讀んだもの、經驗したことなどについて、漫然と談話させるのである。餘り長くないものなら讀ませることもある。雑誌に出てくる續きものなどで、特に子供達の興味をひいてゐるやうなものは、時間が長くかゝつても、讀ませることにしてゐた。さうしては皆で、そのことについて、話し合つたり、その作品の批評をし合つたりすることにしてゐた。さうして、きたない表現、低級な中味に、子供達がだんだん氣が付き出す。私達はまたよく雑誌の表紙繪、口繪の批評會をした。幾冊かの雑誌をくらべさせてみると、中に盛られてゐる趣味が、大體想像出来る。この頃少女雑誌の表紙繪口繪の類が、非常に悪化して、青年少女の甘い心に喰入らうとする手腕がなかなか巧妙になつてゐる。雑誌をつくつて賣る方から言へば、そこが商人の立派な腕なのであらう。さういふものも、蔓れるだけは蔓つたらよからう。讀みたいなら讀んでもよからう。低級なものもあり、高級なものもあるの

で、良きものゝ、味がだんだんわかつて来るのだから。讀物のことについては、父兄に話すとも、子供には話さない方がよい。さし止められたりすると、好奇心から尙讀みたくなるのが人情で、私達大人にさへさういふ心理が働いてゐるのだから。一方ではさういつた「漫談會」などを開き、一方ではまた、只漠然とした抽象論ではなしに、この讀物からかういふ影響を受けてゐるやうだが、どうであらうかと、具體的な相談をかけて、父兄と意を通じて行くやうにしたいと思ふ。私の學校では、教室毎に圖書棚の備附があり、良い書物はどんどん買入れてやることにしてゐるので、指導には非常に都合がよい。とにかくにも、子供の心を肥やしてやるのが第一である。自分からだんだんに低級なものに遠ざかつて行くやうになれば、さういふ營業者は喰込まうとしても、喰込みやうがなくなるのだから。それには、只かういふものを讀むな、こんなものは詰まらないと言つたのでは仕方がない。大膽にかまへて、低級なものをも禁止しないことである。さうして、具體的に事實について納得させて行くことである。つまり批評眼を養ひ、力をつけてやることである。指導の要領は、恐らくこれ以外にはなからうと思ふ。

#### 【四】夜の世界

明治の文豪小泉八雲氏は、「お寝みなさいませ」といふ子供達に夜の挨拶に對して、「よい夢を見せう」と、何時も答へたさうである。その人の倅がしのばれる。よき言葉だと思ふ。よき夢の世界、人生によつてこれ程幸福な世界がまたとあらうか。晝は帝王として何不足なく暮し、夜になると乞食になつて路傍に迷ふ夢をみる人と、晝は乞食になつて路傍に迷ふとも夜になると帝王になつて慈愛の世界に温い夢を結ぶ人と、何れが人生の幸福者であらうかと問はれた人の話は、誰も知つてゐると思ふ。心によき想像の世界を持つてゐる人でなければ、よき夢は恐らく見られないであらう。よき夢を見ることの出来る人の心は、悪いことの出来ない淨さに光つてゐるであらう。われわれ大人に比べて、子供の夢はどんなに美しからうと思はれる。賢母は半意識の教育といふことを言ふ。美しい話を聞かせながら、子供と共に寝る。よき話を聞きながら、話のやうな美しい夢の世界へと、子供は眠りに沈んで行く。子供と母にとつて、これ程楽しい時間もあるまいし、これ程うれしい教育法もあるまいと思ふ。私は綴方「夜中」を讀んで、讀物から來る影響のことを思ふと同時に、夜の世界



のことを思うた。この世界を美しいものにしてやる仕事は、そもそも何であらうか。今の学校には、綴方において他にないのである。綴方の教師こそ、自重す  
きだと思ふ。

第十四講 子供の種々相

【二】五十人五十色

私は今迄、なるべく一般の子供に通じた例を多くあげて、そのことで話をすゝめるやうにして来た。それだけのことなら、教育の仕事は割合簡単である。しかしなかなかそれだけでは済まない。五十人は實に五十色なのだから、興味も深い代りに、並大抵では過ぎられない。今迄あげて来た綴方の一々についても、さういふことは大體解つてもらへると思ふが、ここに特別な子供の例を一二のべてみる。

【三】文例 白粉

(五年女兒)

月曜日の雨ふりの日であつた。私は遊ぶことがないので、坐敷でねころんだりころこんだりして遊んでゐた。が面白くないので、けしやう場にはいつて、おけしやうをはじめた。きやうだいの引出しから、粉おしろいを出して、手につけて、びつと鼻のさきへつけた。面白くもないのに、

「ええ……………」

と、やうすをして笑つて、鏡にうつした。それから、横に掛けてあつたお母さ

んの着物を着てみた。すそがながくて、いやらしかつた。私はその着物の上に、お母さんの帯をしめ、えりをすかしたりして、一人で遊んでゐた。しばらくたつと、首すぢから汗がじくじくと、わいてきた。氣持がわるかつたので、おふろへ行かうと思つて、ふろ行きの用意をした。其の時ほしかつたのは、ねりおしろいであつた。私のおしろいは、粉おしろいしかなかつた。それで粉おしろいをクリームのあきびんに入れて、其の上へ水を入れたが、おしろいだけが、ぶうつと浮いて、うまくならなかつた。すぢたでの先でかきまはすと、よくなつた。私はそれを手の先につけて、ほつべたへつけた。うすくて、わからないほどだつた。はらが立つたので、びゆつと、庭さきへほつた。おしろいは、松の枝にかゝつた。私は、其のまま又けしやう場にはいつて、櫛とびんを持つて、そこを出て、それをかなだらひに入れた。そして、手ぬぐひとせつけんを入れて、おふろへいつた。雨はひつきりなしに降つてゐた。私は道々、ねりおしろいをほしいと思つた。前先生が、子供のうちは、おしろいをぬらない方がよい。子供の顔におしろいをぬると、ひふがあるとおつしやつた。其の時はさう思

つたが、やつぱりおしろいがほしくなつた。そんなことを思ひ、おふろ屋の前までいつた。からかさをすぼめて、中にはいつた。一人の若い女の人が、鏡の前で、しきりにおしろいをぬつてゐなざるのが、一番先に目についた。

「やあ、私わたしかて持つて来たたらよかつた」

と思ひながら、着物をぬいで、金だらひを持つて中にはいつた、むうつと、なまぬるい湯氣が、私の顔にあたつた。かゝり湯をして、湯の中へはいつた。其の日、おふろは大へんつかへてゐたので、すはる所がなかつた。若い女の人たちは、おしろいをきれいにぬつてゐなかつた。それを見ると、うらやましかつた。だいぶんぬくもつたので、お湯からあがつた。薬湯のそばの、せまい所へすはつて、洗ひ出した。私の前にゐなかつた年よりの人が、よその人に肩をながしてもらつてゐなかつた。ほつと後をむくと、十五六の女の子が、やうすをして、耳の後ろにおしろいを一ぱいたためて、湯にぬくもつてゐた。

「やあ、あの子み。おしろい一ぱいたためて、いやらしい子やな、私にちよつとたまつてるとこ、くればたらええのに」

と思ひ思ひ、其の子を見てゐた。其の時、よい考へが出た。それは、おしろいをうまいことぬれたら、買うてもらふことであつた。それで今日は、せつけんをおしろいのかはりにして、おしろいぬるけいこしよう。と思つた。さつそく、首の所をふいて、せつけんをぬり出した。それから、かがみの前に立つて、口を横へゆがめたり、齒を出したりして、おしろいをぬるけいこをした。あんまり長いこと、そこに立つてゐたので、汗でのぼせて来た。耳の後からも、頭のところからも、汗が一ぱい出てきた。そのために、首筋へ、きれいにつけたせつけんが、あわになつて、どろ／＼と胸の前へ流れてきた。その時、さつき自分でこしらへたおしろいを捨てたのが、今になつておしくなつてきた。

「なんでほかしてんやろ」

と思ふと、おしろいがほしくて、たまらないやうになつてきた。こんなことをして、ぼんやりと人々のおしろいをぬつてゐなざるのを見て居た。みんなは、氣持よささうに、きれいな白い顔をしてゐた。私の顔は眞赤で、で、ぼちんの所が、びかびか光つてゐた。まるできんときこのやうだつた。そんなことを思ふと

はづかしくなつてきた。

「私學校で色白いて言はれてるけど、そんなに白いねんやろか」と、心の中で思つた。ふろから上つて、着物をきるところへ出た。すうつとした細い人が、鏡の前で、おしろいをぬつた所を、べつたらべつたらとたたいて居た。私も鏡の前に立つた。すると、其の女の人が、私の顔を見て笑つた。私は少しはらが立つた。

「あの人み。えらさうに、自分べつびんやと思つて、私の顔見て笑つて。いやらし人」

と思つて、私はすぐひつこんだ。

「ちよつとでも、おしろいほしいな。こんなに顔赤いのに、家に歸つてお母ちゃんにおこつてやらんならん」

と、一人ことを言ひ言ひ、着物をきて、いそいで家へ歸つた。歸るなり、鏡の前へすはつて、粉おしろいを鼻さきだけへこく、ほつぺたのあたりは、うすくぬつた。見ると、自分でもべつびんに見えた。この時、ふる屋で笑はれたこと

がくやしくなつて、もう一べんあの人の所へいつて、べつびんのくらべ合ひしてやろかと思つた。私は、

「私おしろいぬつたら、このくらゐ、べつびんに見えるのに、おしろいぐらゐ、知れてるのに、買うてくれたらええのに」

と、うちわであふぎながら、つぶやいた。そこへお母さんが、おもてから歸つてきなさつた。お母さんは私の顔を見るなり、

「お前おふろへ行てきたんか」

と、目をくりくりさせておつしやつた。

「お母ちゃん、ねりおしろい買うてんか」

と、私はすぐ言つた。

「まあ、何言うてなはんねん。小さいくせに、おしろいなんかぬつて、もう知らん知らん」

といひ、お母さんは、あちらへ行つてしまひなさつた。

「やつぱし、お母さんが若い人やつたらええけど、うちのお母ちゃんみたいなの、

年よりやつたら、あかへん」  
と、大きな聲で、どなつた。お母さんは、店の方で笑つて居られた。

小間物屋さん

(五年女児)

夕方、いつも来るおばあさんの小間物屋さんが、よちよちと、私の家へはいつて来た。

「嬢ちゃん、今日なんかいきりまへんか。お母ちゃんに聞いてきて下はれ」

と、おかしい言葉で、小間物屋さんは、私に言つた。私は座敷で本を讀んでゐたが、奥へいつて、

「お母ちゃん、小間物屋さん来てはるで。私のおしろい買うてさ」

といつた。お母さんも、なにか買ふものがあつたのか、新聞をよみやめて、

「そしたら、ここへ来てもらひ」

とおつしやつた。私は走つていつて、待つてゐた小間物屋さんに、

「ちよつと奥へ行て下はらんか」

と言つた。

「へえ」

といつて、その人は奥へ行つた。お母さんは、

「上等のピンツケ持つてなはるか」

とたづねた。小間物屋さんは、せなかにせおつてゐた荷物を、下し下し、

「持つてまつせ。まあ見てくだはれ」

といつて、荷物をひろげた。私は横にすはつて見てゐた。小間物屋さんは、木の箱からピンツケを出して、

「これ、なかなか上等だつせ。まあつけて見ておくれやす」

といつて、お母さんに渡した。お母さんはピンツケを持つて、

「なんぼだんねん」

と言ひなさつた。

「まけてまけて三五にしときまつさ」

と、お母さんの顔を、のぞくやうにして言つた。お母さんは目をくりく／＼させ

て

「へ、なんとたかいの。こんな、そんなに高いのならいらんで。おばはん、もつとまけときなはれ」

とおつしやつた。小間物屋さんはまじめな顔で、

「奥さん、ほんまに、こんな三五四であつたら、わて買ひまつさ。ほんまに、これ四十銭だんねんけど、まけてまんねんで」

「さうか知らんけど」

いひいひ、お母さんは、ピンツケのふたを開けて、鼻の先へ持つていつて、かぎなかつた。小間物屋さんは、お母さんの顔を見て、

「ええにほひ、してまつしやるな」といつた。

「ねつから、ええにほひもしまへんわ」

と、お母さんが言つた。私は面白くなつたので、ぶつとふき出した。小間物屋さんは、私の方を見て、

「なあ嬢ちゃん」

といつて、又お母さんの方を見て、

「嬢ちゃん笑てはりまつせ。もうさうしてしんぼうして買うといてくだはれ」と、お願ひするやうなかつかうをしていつた。お母さんは、しかたがなかつたのか私に、

「そしたら三十銭だけ出して來」

といひなかつた。小間物屋さんは、

「そんなんあきまへんで」

といつた。私は、ぜに入から五十銭銀貨を出して、お母さんに渡した。

「私のんおしろい買うてさ」

「お前等みたいな黒い首に、おしろいぬつたらいやらしい」

お母さんは、まゆ毛とまゆ毛の間をしわよせて、おつしやつた。小間物屋さんは、おしろいを出して、これはおしろい下、これはまひ子、おしろい、といつて、色々おしろいを見せなかつた。

「そんなものいりまへん。なほしなほし」

と、お母さんは、手をふつて言ひなされた。お母さんは私の方を向いて、

「買はへんと言うたら、買はへんね。しつこう言うたら、あきまへんで」

と、おこるやうにおつしやつた。

「そろもう、奥さんむりだつせ。娘はんといふもんはな、やつばしおしろい買

はんと居られしまへんで」

と、小間物屋さんは言つた。お母さんは、

「いらんいらん。おしろいみたいなもの、ぬらさしまへん。とんなにおしろい

ぬりたかつたら、じよいうに行きなはれ」

といつて、私をしかつた。私は少しはづかしかつたので、奥のすみへいつて泣

いて居た。小間物屋さんは、荷物をかたづけ、出ていつた。

### 【三】十人の凡人。一人の變り者

この子供など、少々變つてゐた。この綴方に出てゐる通り、女學校の上級生あたりが持ちさうな氣持をちやんと持つてゐる。さういつた類のことだけではなく、

各方面に随分變つてゐた。綴方などもなかなかうまかつた。しつかりした考も持つてゐたし、それでゐて浸しがたい威嚴をどつかに持つてゐた。將來きつと何か出来さうな子供に思へて、私は目をかけた。この子供に限らず、一體に、特徴のある子供は、非常に目に立つ。これはと思はせられるやうなことを、よくやつてくれる。しかし驚いてはならぬのだと、私はその度下腹に力のはいるやうな感があった。さういふ子供こそ、教育の仕甲斐のある子供だと思ふ。徒に道徳的な規範で押しきるのではなく、一人一人の個性を、じつと眺めて、その個性のための、よい道連れになつてやりたい。十人の凡人には泣かされないが、一人の變り者には泣かされる。しかし、教師を仕事とするからには、さういふ子供のために、心から泣いてみたい。そしてまた、心から喜び、希望してみたい。この子を導いてゐるのではない、自分が導かれてゐるのだと、私はよく思つた。變り者が多いほど、力應へがする。その力應へが、私を思索に導き、讀書に誘ふ。教育の面白味は。さうなつて來なければ、本物にはならないのだと思つてゐる。

第十五講

讀本の材料と子供の綴方



【二】文例 お手紙 (五年女児)

外から歸つて、机の前にすはつた。仕事がなかつた。それで、九の巻の讀本を出して讀むことにした。氣に入つた文がなかつた。頁をめくつてさがした。

「第二十三手紙」があつた。それが面白いだらうと思つて、讀み始めた。

「昨日は美しきお話の本御送り下され、誠に有難く存じ候。あの中にて、一番面白き話をよくおぼえ置き、來週學校にて話し方の時間に話し、同級の人々を驚かさんと楽しみ居り候」

と讀んだ。「候文みたいなもの、子供に合はへん。一寸この文へたくそや」と、ひとり言を言つた。その文を讀んでゐる中に、ふと中西さんに、御手紙の返事を書かうと思ひついた。

「あ。せやせや」

と言ひながら、原稿用紙をとつて來て書き出した。どう書いてよいかと、考へて書き出した。

「中西さん、御手紙ありがたう。もう暑中休も半分すぎました。あと半分楽しんで遊びませう。先生に出ず仕事は、二週間程でしてしまひました。だんだん涼しくならんならんに、夏よりも暑いのでこまります。毛を短くつんで、えび茶色の洋服を來て、髪に小さいリボンを結びつけてゐる、いつもむちや氣にしてゐる中西さんが、目にうつります。浅田さん。平井さん、橋本さんを連れて、一度おあそびに來て下さい。おこし下さつたら、おべん當持で、公園を散歩ませう。夕方公園へゆくと草むらには、きりぎりすのお歌が聞えます。」と書いた。お母さんに讀んで聞かさうと思つて、針仕事をしてゐなざる所へいつた。

「お母ちゃん。中西さんにお手紙書いてん。聞いてちやうだい」といふと、お母さんは、

「はいはら」

といつた。讀み始めた。讀み終ると、お母さんが、

「お前上手や、姉ちゃんより上手や。やつぱり池田先生の子やさかいに、こん

なに上手やね。字はこれできれいやし」と言ひなされた。私はなんだかうれいしい氣持になつて、その手紙を入れにいづた。

### 【三】心と心の開き

文部省の持つてゐる心と、事實子供の持つてゐる心との間には、非常な開きがある。時代が變り、子供の心が、今迄の通りに納つてゐてくれなくなつて來たからには、文部省もこのまゝでは、ちつとして居られないだらうと思ふ。近く國語讀本がかはるさうだが、果してどんな姿で、教育界にあらはれてくるか。私達國語の教師は、元氣を出したい。二十年殆ど無進歩な、綴方の原野に、堂々と立派な道を、きり開いてみたい。その熱を失ひたくない。そして勉強し、修養したい。私達の前途は、これからである。

## 子供と綴方教育 終

昭和四年三月廿日、初版印刷  
昭和四年三月廿五日、初版發行

子供と綴方教育〔奥付〕

定價金貳圓六拾錢

著者 池田小菊

發行者 藤原惣太郎

印刷者 山崎治兵衛

東京市京橋區八舟町五丁目一番地  
東京市京橋區南八丁堀三丁目十番地



發行所

東京市京橋區八舟町五番  
報替東京一八五一三番

明治圖書株式會社

賣捌所

東京

林六合館

大阪會社

柳原書店

名古屋市

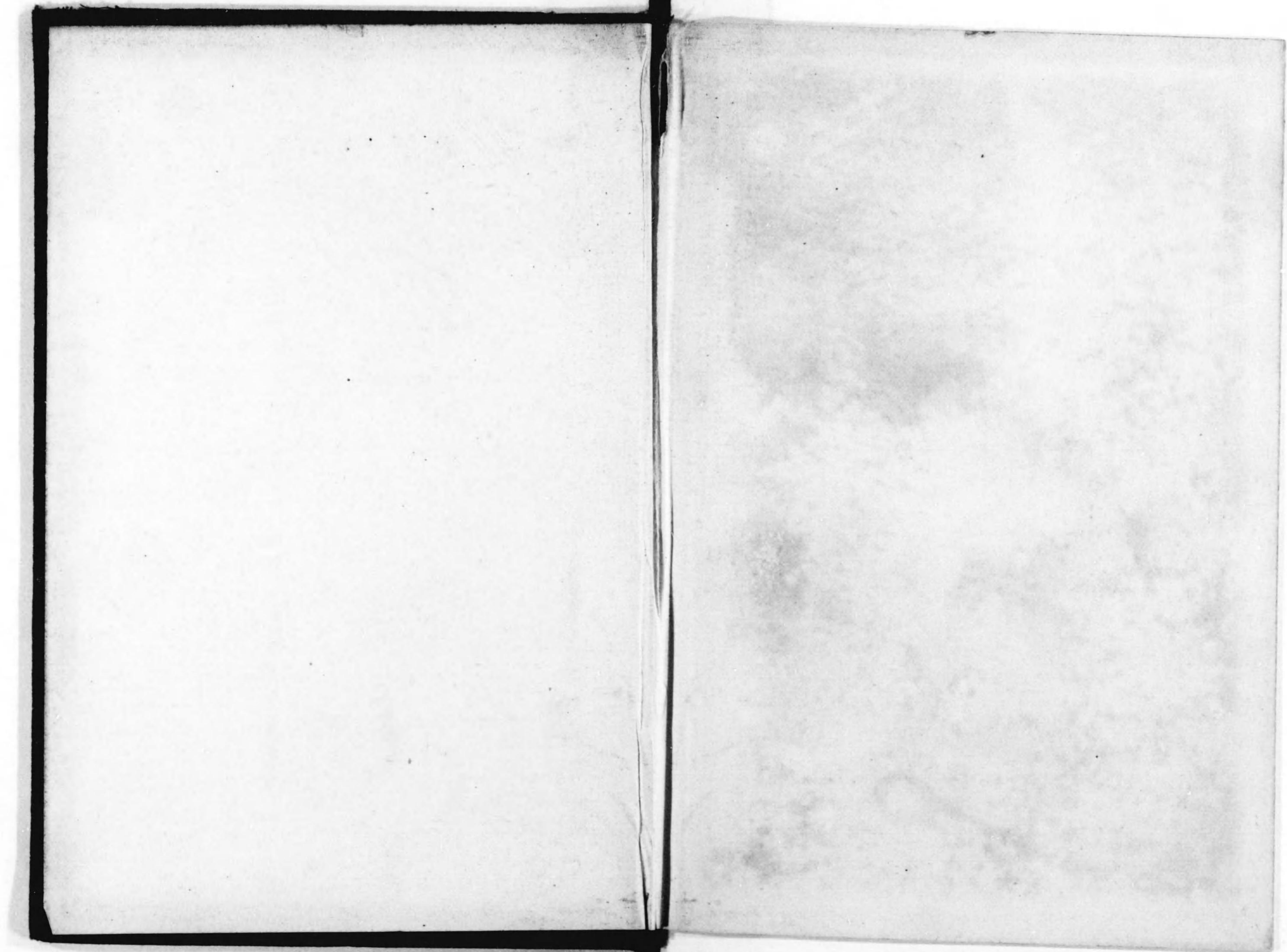
川瀬書店

久留米市

菊竹金文堂

佐賀市

大坪惇信堂



終